



# 教職大学院 Newsletter

# No. 135

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

since 2008.4 2020.5.20

## 連携が生きる未来の附属学校園を求めて

福井大学教育学部附属義務教育学校長 兼 附属幼稚園長

福井大学連合教職大学院教授 北典子

この4月に、常勤する福井大学教育学部附属義務教育学校長 兼 附属幼稚園長として着任しました。

3月末まで、福井県教育総合研究所内の教育博物館に勤務していました。教育現場を離れ、自身の無知を痛感するばかりの中、福井にゆかりの先人の業績から福井県の教育の素晴らしさを改めて学びました。高齢者から子どもまで世代を超え来館される方に、本県の教育に親しみを持っていただけるよう展示の紹介に努めてきました。

また、30数年前に、附属中学校（現義務教育学校後期課程）に10年以上勤務していました。「研究同人として腕を磨き、実践共同体としてその実績を世に問うことが附属の使命」と熱く語り合う教師力と人間力を兼ね備えた諸先輩に鍛えられ、「附属愛」を伸ばさせてきました。当時から、社会情勢や世界の動向の10年、20年先を見越した教育活動の開発と発信に取り組んでいたのです。

県内での新型コロナウイルスの感染脅威が声高に叫ばれる前の3月下旬に、何年かぶりに附属中学校の校舎を訪れました。校舎内を歩きながら、あの日、あの時の子どもたちの発言や会話が聞こえてくる感覚にとらわれました。多くの卒業生が、校訓「自主協同」を合言葉に仲間と話し合いを重ね、探究・創造・表現する活動に取り組んでいた姿が鮮明によみがえりました。同時に、今在籍する子どもたちが、議論を交わす授業中の姿を想像しました。学校文化

の伝統が継承されているこの教室で、時代を超えて両者が重なるように感じた瞬間でした。

しかし、残念ながら、新型コロナウイルスが猛威を振るい、感染対策で学校休業が続く中、子どもたちとの対面が延期されています。

さて、中央棟と呼ばれる管理棟にある合同職員室とプロジェクトルームは、義務教育学校の心臓部分にあたります。子どもたちの成長を願い、本校の4つの使命（教育実習学校・教員研修学校・義務教育学校・地域に貢献する学校）の実現に取り組む全教職員の英知を結集する場ともいえます。第1回合同教育実践研究会に参加して、研究部3人の実践研究への熱意を強く感じました。教員文化に差異がある前期課程と後期課程が互いに歩み寄り、教員と子どもたちが協働探究する「プロジェクト型学習」の授業実践を推進しています。柔軟な発想で、9年間の教育課程のデザインを構想する教員間の協働関係が築かれていると感じました。

### 内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ自己紹介 (3)
- 院生自己紹介 (6)
- カンファレンス準備会に参加して (24)
- 東京サテライト校紹介 (34)
- 教育改革の動向 (35)

緊急事態宣言を受け、4月中旬から本校のホームページで配信している生活・学習支援の動画内容も、「探究型」の視点から構成されています。一問一答型の解説や教員からの一方的な課題提示を避け、子どもたちの探究意欲を刺激し、次の課題への発意を引き出す課題設定から学習が展開しています。これからの時代に求められる資質・能力ベースの学力育成の柱に、「プロジェクト型学習」を据えた本校の取り組みは、新たな方向性を示す県の教育モデルになると考えています。

また、附属義務教育学校に入学する子どもたちを育てる附属幼稚園は、子ども自身が自らの感覚をひらいていくことを大切にしています。それぞれの遊びを縦糸、年齢ごとの発育過程やスキルの習得を横糸ととらえ、「遊びを通じた学び」を紡ぎ出す教育活動に取り組んでいます。臨時休園が求められる中、毎日、「にっこり動画」として言葉遊び、体操編、園生活の流れなどを配信しています。先生自らが企画から演出、出演までこなすチーム力の素晴らしさと、毎週、研究通信を発行し研究を牽引する研究主任のリーダーシップには頭が下がります。

私の使命は、子ども一人ひとりの個性や特性を伸ばし、子どもたちの可能性を拓いていくために、12年間を見通した教育活動の開発に取り組むことだと捉えています。

## 1 幼稚園と義務教育学校の接続

まず、義務教育終了段階までに培うべき資質・能力を明確にし、その連続性と発展性を改めて考察することが重要です。その上で、幼稚園の研究内容や発達段階に応じた教育課程と、義務教育学校の9年間の教育課程をつないでいきます。幼少中12年間の資質・能力育成カリキュラムの編成に向け、一步を踏み出したいと考えています。

## 2 多彩な専門機関との連携

子ども一人ひとりの感性や知性を刺激する多彩な体験活動を積極的に取り入れたいと考えています。英語でのOECD日本イノベーション教育ネットワーク参加はもとより、ふるさと福井への愛着を高める観点から、県文学館、県教育総合研究所内の科学ラボ、教育博物館、様々な博物館といった専門機関との連携を推進していきたいです。実物や本物に触れる学びは、子どもたちの知的好奇心や探究心だけでなく教員自身の専門性をも高め、両者の視野を拡げていくと考えるからです。

5月末まで緊急事態宣言延長による休業期間が継続される今、一日も早く平穏な日常生活が戻り、学校が通常の機能を果たすことが願いです。子どもたちが、普段通りの園生活や学校生活を送れる日を心待ちにしています。幼稚園の年少児から9年生までの子どもたちの明るい笑顔と出会いたい。仲間とさまざまな活動に、生き生きと取り組む子どもたちと出会いたい。先生方と子どもたちが創り上げていく授業や遊びを見たい。子どもたちの学びの様子を語り合い、一人ひとりの子どもの特性や仲間関係を共通理解し合う先生方の会話を聞きたい。先生方が「主題・探究・表現型」の授業や遊びをデザインする話し合いの過程に参加したい。研究のための研究に陥らず、自ら構想した授業展開を真摯に省察し研鑽に励む先生方と語り合いたい。そんな思いが日に日に高まっています。

「出会いで人生は変わる」とよく耳にします。6月から、新たな風景が加わることに期待しながら、一人の人間として誠実に挑戦していきたいと思えます。

## スタッフ自己紹介

### 新たな出会いによせて

福井大学連合教職大学院准教授 谷 裕子



初めまして。4月1日付けで連合教職開発研究科専任教員として着任いたしました谷裕子と申します。3月までは、40年間地方公務員をしていました。初めの1年間は庁舎で事務をしていましたが、あとの39年間は

高浜町内の各保育所で保育士として勤務していました。所長になってからは、町立保育全体の質を向上させるための取り組みを研究グループと共に推進してきました。その際にお世話になったのが福井大学の岸野麻衣准教授です。それが私たちと福井大学との出会いでもありました。そしてそのご縁がきっかけで今年度、こちらに勤務させていただくことになりました。

岸野先生との出会いは、8年位前の福井大学での講演会でした。子どもたちの遊びから繋がり展開していく日々の遊びや行事について話しておられました。その頃の私たちは、目指す子ども像を掲げ、保育者がそれぞれにクラスの子どもたちに粛々と保育をしてはいるものの、保育者発信の設定保育であるべきなのか、子ども中心の自由保育がいいのかということにおいて、町全体の保育の方向性が曖昧で、それぞれがなにかもやもやしたものを感じていました。そんな私たちにとってこの日、何かを“見つけた”ような気持ちになったのでした。「こんな保育がしたかった！」と参加した3人で公用車の中で盛り上がったのを昨日のこのように覚えています。その後、岸野先生に公立保育所全体の保育のご指導をおねがいし、「まずは保育を見せて下さい」というこ

とで、公開保育を手始めに私たちの模索が始まったのです。

一言で公開保育といっても現場の保育士の下承が得られないのは容易に想像ができました。しかし、すでに管理職となりクラス担任を持たない私自身が保育を公開することもできない中、立ち上げた研究グループの若い職員が公開保育をしてくれることになりました。当初は、クラス単位の設定保育を公開することからだったのですが、クラス単位の活動中心ではあるものの、徐々に子どもの遊び中心で、自由に動きまわることができる保育に変化していったことで0歳児から5歳児までの保育所全体の公開保育が必然になっていったのでした。それと共に各保育所の公開保育を通して他者の保育を見取ることが少しずつですが出来るようになり、保育士が自分の保育に対する思いを語ることもできるようになってきたのです。

福井大学で行われるラウンドテーブルにも研究グループの若い保育士たちは積極的に参加してくれ、ZONEでの発表、ポスターセッションも経験させていただきました。その際行動をともにした私は、福井大学の開かれた学びの形を何度となく肌で感じる事が出来ました。発表に際して当初は緊張していたものの参加されている他分野の先生方が、若い保育士の言葉に真摯に耳を傾けてくださり、充実した時間を過ごさせていただいたことを感謝するとともに、諸先生の貪欲な学びあいの姿勢に圧倒されたのも事実でした。

自他園での公開保育、エピソード記録からの事例作成、その事例をもとにした事例検討会、それらの学びを経験してきたことで、私たちは子どもと共に感動し、不思議に思い、悩み、一緒に遊びを構築し

ていくそんな保育を徐々に楽しむことができるようになってきました。それはまさしく子どもの育ちとともに保育士も育っていく姿そのものでした。私は、そんな保育所という現場が好きでした。日々の子どもたちの育ちも嬉しかったのですが、それを援助しようと自分なりに精一杯向き合う保育士の姿を見るのが嬉しかったのです。子どもたちと共に成長し、遊びからの経験をもって作り上げる運動会や生活発表会を見ると単純に感動しました。それまでの過程を見てきているからこそなおさらでした。そんな感動を沢山与えてもらったことに今も心から感謝をしています。

今までは高浜町という小さな枠の中からは保育を見ることができなかつた私が、今回多くの就学前機関の教育、保育を見せてもらうことができる機会をいただきました。一人ひとりの子どもと真剣に向き合い、環境設定や、その材料の与え方ひとつにも悩むことのできる先生方に沢山出会えることが楽しみで仕方ないのです。と同時に異校種の先生方との出会いという新たな学びの機会をもいただいたことを感謝しております。どうぞよろしく願いいたします。

## 10年の空白を置いて古巣に戻りました

福井大学連合教職大学院 客員教授 寺岡 英男

この3月に福井大学を退職し、4月から教職大学院の手伝いをさせていただいています。実に「10年間の空白」を置いて古巣の教職大学院に戻らせてもらいました。4月の下旬には、最初の拠点校訪問に加わり安居中に行きました。教職大学院を一緒につくってきた牧田校長先生はもちろん、久しぶりにお会いする先生方もおられました。休校中なので、先生方が独自にネット配信で教材を作り3日ほどで更新している。ネット環境のない家庭用にDVDに焼き、学校玄関の外側にいつでも持っていけるよう山積して置いてある。全体の研究会では、研究主任で院生でもある伊部先生から、「学校とは何か」という問いが先生方に発せられました。

ところで定年の年齢を越えてこの10年間、何をしていたかといいますと、大学の役員(理事・副学長)として、そしてその後半の4年間は、国際地域学部という新学部で専任教員として関わってきました。役員では大学の教育・学生担当で、大学教育の授業・カリキュラム改革や国際化、学生の学習や生活環境の整備、そしてメンタル面での学生対応などが課題でした。中教審などの指摘として、大学生は小中学

生よりも授業以外の学修時間が少なく、教育のガバナンスも弱いという問題がありました。学生はもう大人なのでガバナンスを利かせるのもどうかという古くからの意識が、今でも大学教員の中には少なからずあります。これに関して、教育の改革と評価のための国際アドバイザーをお願いし、3回に亘って本学に招聘したブラウン大学(現メリーランド大学)のタカヤマ博士はこう述べています。米国のアイビーリーグの1つであるブラウン大学でも、入学後の大学生を自立した学生とみるのではなく、むしろ大学生活全体の中で自立した大人として成長・発達させるための手立てをどう講じるかが重要であると。例えば授業やカリキュラムの改善に学生の声・評価を反映させる仕組みをつくり、また新任教員のガイダンスや教育の運営にも学生を参加させているということでした。

国際化の取組では、欧米やアセアン諸国と比べ日本では極めて遅れているmobilityをどう作り出していくかが大きな課題でした。国際地域学部では、学生の交換留学を全面に、そのための数十大学との協定の締結し、国際的に通用する教務のシステム化

の構築を図り、学生の派遣と受入れによって mobility を高めるようにしました。役員としては、行政や経済界等と関わるという、教員養成の畑を歩いてきた私にとってはなかった経験も貴重でした。これがベースとなって、国際化と地域創生に取り組む国際地域学部や、企業や自治体に勤める社会人のリカレント教育を主とする専門職大学院の設置に関わることができました。県内はご承知のようにものづくりを中心とした中小企業が多いのですが、そうした企業でも国際化は否応なく直面しているところが多く、また社員のキャリアアップについて社内外での研修や教育プログラムに熱心に取り組んでいます。この辺のニーズに高等教育としてどう応えるのか、突きつけられている課題です。

ただ新型ウィルスの大変な広がりや、こうした大学教育の見直しを求めます。教育費無償を高等教育に広げたとはいえ、その範囲はごく限られたものであり、近代の教育原則でうたわれていた理念から見れば全く程遠い国の貧困な政策の中で、学生の教育への機会をどう保障するのか、社会を閉ざすのではなく開かれた社会の中で mobility をさらにどう発展させていくのか、社会人のキャリアアップを図っていくために企業や自治体等と大学が協働する体制をどう構築していくのか、課題は深刻です。それらに直接のコミットはできないのですが、大いに関心を以て行きたいと思っています。

戻る機会を得た古巣は、この間、全体を貫くコンセプトはゆるぎない一方で、人的にも取組についても規模は大きく変わりました。かつては若手であった研究者教員が今や主要な担い手となり、若手教員や機関研究員がアクティブに役割をこなしている。実務家教員は、実践的経験の豊かなベテランが目

細かく配りアドバイスし、修了した現職教員が学校や行政の管理職等で活躍し、入れ替わった新しいメンバーが、前からいたかのように活動している。また著しい展開を見せている国際化を担うメンバーは、それだけの業務だけではなく、コミュニティのメンバーとしての力量を形成している。メンバーは、多重なコミュニティを形成し、文字通り『コミュニティ・オブ・プラクティス』を実践し発展させているという印象を持ちました。そしてここでもまた新型コロナの問題では、今日あった4月合同カンファレンス準備会の cycle2 のテーマそのものであったように、このような状況の下で学校を発展させるために学校の実践を問い直す課題が提起されているのだと思います。今後の国際化の取組の課題も同じだと思っています。

3月の退職の際、国際地域学部と専門職大学院の設置（加えて教職大学院のアフリカ等の国際展開も）については大変お世話になった本県出身の伊藤忠・小林栄三特別理事（元会長）は、その返信の中で次のように述べておられます。

「新型コロナ、大変な状況になってきましたね。福井の状況も心配しています。

こんな大混乱の後には、新しい秩序がいろんなところで生まれると思います。

そんな状況を先取りして、新しい成長・発展を希求していきたく思っています。」

「空白の10年間」のこれまでとは違った経験と、いま問われている大きな課題も意識しながら、教職大学院の実践コミュニティの一員として学ばせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 院生自己紹介



### 仲村 俊太郎 なかむら しゅんたろう

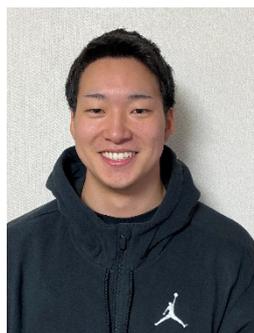
今年度より、連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コース（4系）に入学しました仲村俊太郎と申します。

昨年度までは、福井大学教育学部の中高等教育コース（社会科専攻）に所属していました。取得免許は小学校一種、中学校一種（社会）、高等学校一種（地理歴史、公民）、特別支援学校一種です。趣味は、楽器、料理、メダカです。特に楽器は、中学校、高校で吹奏楽部に所属していたため、色々な楽器を演奏することが好きです。去年、アルトサックスを購入したのですが、まだまだ初心者です。しっかり練習したいなと思っています。また、最近のブームはボードゲームです。

大学の卒業論文では「社会科における資質・能力の教育の在り方」について研究しました。その中で、グローバル化や情報化、少子高齢化など変化の激しい複雑な現代社会には、それらの問題を解決し、持続可能な社会をつくるために、主体的に答えを作り出す力や、情報を使って考え、まとめて新しい考えを生み出す力、新しい考えを創造する力などを子ども達に育てていくことが求められていることを学びました。その結果、教師は子どもの学びを深めるために、多様な価値観から生まれてくる問いが出てくる「開かれた問い」を投げかけたり、子どもの学び

の過程の中で学びをより深める内容を適切に伝えたりする言葉の力が必要になってくると考えるようになりました。また、附属義務教育学校後期課程での主免実習と成和中学校での学校インターンシップにおける学びから、いかに必要最低限の言葉で生徒たちの学びを繋げられるかが重要であることに気づきました。そのため、教師は子どもの学びを深めるための言葉を精選する力も求められます。教師は学びを繋げるファシリテーターとしての役割が求められるため、授業において子どもの学びをより深めるための「言葉」とは何かについて今、大変興味があります。

加えて、特別支援教育にも興味があります。特に、通常学級での生きづらさや、学びづらさを感じている児童・生徒に対してどのような支援を選び取っていくのか、その支援体制の構築など、多くの課題を感じています。子どもたちにとって、学校を安心して生きる力を身に付ける場所となるようにしたいです。そのためにも、大学院では長期インターンシップで「言葉」に注目し、その実践を生かして、子どもの思いに温かく寄り添い、社会との向き合い方を一緒に悩み、少しでも子どもの人生がよりよくなる力になれる教師を目指したいです。よろしくお祈りします。



### 鈴木 克学 すずき かつのり

はじめまして。この4月から授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました鈴木克学と申します。昨年度までは、関西学院大学教育学部に所属していました。

大学在学中の4年間は、主に教職について学びました。教育に対する知識等はもちろんのこと、教育実習やボランティア等、子どもたちと関わる多くの機会を得ることができ、教師を目指す私にとって、偉大な経験をすることができました。これらのことにより、現在では、大学入学当初よりも、一層、教

師を目指したいという気持ちが高まりました。しかし、一方では、教育実習等や学校現場で学べば学ぶほど、自分の「教育」に対する力量不足を痛感しました。

入学後は、学習指導、生徒指導、学級経営、部活動指導など、教師を目指すにあたり、学校現場（長期インターンシップ）等で様々な経験をし、さらに「教育」に対する理解を深め、教師の力量形成を図りたいと思い教職大学院への進学を決めました。

今年度から、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程で長期インターンシップをさせていただくことになりました。この長期インターンシップは、教育実習とは違い、長期にわたって、実践的に学んでいくことができるため、この機会を大事にし、多くのことを学んでいきたいと思います。子どもたちとの関わりの中で、子どもたちへの理解を深めること、ベテランの先生方の授業を参観し、どのように授業を展開すべきなのか、悩んでいる、困っている生徒や保護者に対して、どのように対応するのか、教員同士の連携はどのように図られているのかなど、多面的、多角的な視点で学んでいきたいと思います。

学習指導に関しては、社会科に対して苦手意識を持っている生徒に対し、どのような手立てをすれば

社会を面白いと思い、社会を好きになるのかを考えながら授業づくりをしていきたいと思います。

生徒指導に関しては、不安を抱えているように見える生徒がいたら、アンテナ高く、すぐにその状況に気づき、支援してあげることができるようになりたいと思います。そのためにも、常に生徒たちから目を離さず、しっかり生徒たちと向き合っていきたいと思います。

部活動指導に関しては、中学・高校・大学でのバレーボール経験を生かし、技術面だけではなく、精神面、礼儀やマナーなどを教えることが大切だと考えており、このことについても、現場の先生方がどのような指導をされているのかも学んでいきたいと思います。

この長期インターンシップは、現時点では楽しみというよりも不安の方が大きいというのが正直なところですが、積極的に現場の先生方や生徒たちとコミュニケーションを図りながら、一日一日大切にしていきたいと思います。また、どんなことも恐れずに挑戦し、一人前の教員になることができるよう、多くのことを学び頑張っていきたいと思います。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。



## 武居 悠輔 たけい ゆうすけ

今年度よりミドルリーダー養成コースで学ばせていただく武居悠輔と申します。現在は、長野県岡谷市立岡谷西部中学校に勤務しており、今年で教員生活15年目に入りました。

昨年のある日、学校長から呼ばれて、「研修に行く気はないか？」と声をかけられました。その時は長野市か松本市の信州大学附属の学校園が思い浮かんだので、「娘たち3人がまだ小さいので、拠点を移しての研修はちょっと・・・」と返事をしたところ、「うん、そう言うと思ったから、拠点を移さずに研修ができるところを紹介しよう。」という学

校長が狙った通りの流れで、福井大学の教職大学院でお世話になることになりました。どこの職場でも「中堅」と呼ばれる年代に入り、新しい刺激が欲しいと思っていたタイミングであったので、全国のような立場の方々と出会えることを、非常に楽しみにしています。

私は現在の学校で、社会科と3年生の担任、陸上部の顧問をしています。初任から3年間は小学校にも勤務していました。今考えると、あらゆる教科指導や生徒指導、学校事務をこなしている小学校の先生方には頭が下がる思いです。また、部活動は陸上部の顧問ですが、私自身は中学生から大学生までバ

レーボールをしていましたので、全く陸上競技はできません。しかし、様々な縁としがらみにより、陸上を教え始めて10年近くになってしまいました。運良く力のある選手に出会い、全国大会に連れて行ってもらったときのドキドキ感はよく覚えています。

さて、福井大学教職大学院で何を学ぶのか。これを見定めるのが最大の難関であり、最もワクワクする部分です。現場で働いていれば、日々の生活で手一杯となり、翌日の授業を考える暇さえなく、更に何かを学ぼうという気持ちにすら、なかなかありません。そうした中で、これからの学校が進む方向性の一つとして興味があるのが、学校のICT化です。この分野は、他国と比べると圧倒的に遅れていると指摘が早くからあり、少しずつ変わろうとしているところですが、奇しくも新型コロナウイルスの影響で、その動きは想像以上に加速すると思います。長い長い3月からの臨時休業の期間、私たちが子どもたちにできることは、あまりに限られていました。確実に変わろうとしているその分野について、今よりもきちんと学んでみたいと思います。

間違いなく、AIや5Gといった次世代の技術に頼らずとも、現在のインターネット環境があれば、学

校へ登校しなくても自宅で学習できます。また、教科書もタブレット1台にデータとしてすべて入れてしまえば、重いカバンを持つ必要もありません。今の学校のスタイルを継続する必要は全くないのです。そしてコンビニの無人店舗や無人オペレーションによるホテルのように、どんどん「人が要らない」仕組みができています。労働人口の急激な減少もあり、その流れは止まらないでしょう。次世代の技術は「人が要らない」仕組みを作るうえでの強力な武器になります。そうした社会だからこそ、子どもを集めて生活を共にする「学校」にしか果たせない役割があるのではないかと感じます。人と人との「生(なま)」の接触でしか得られないものがあると思います。だからこそ、学校のICT化が学校と生徒たちにどのような学びを生み出し、それ以上に「生(なま)」の接触を前提にしている学校がどんな価値を生み出していくのかを考えていきたいと思います。これから始まる2年間の学びの時間を許し、応援して下さった家族や同僚の先生方に感謝し、共に学ぶ教職大学院の先生方の力を借りながら、少しずつ進んでいきたいと思います。



## 牛腸 つぐ実 ごちょう つぐみ

はじめまして、今年度より福井大学大学院連合教職開発研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コース(東京サテライト)の1年生としてお世話になります牛腸(ごちょう)つぐ実と申します。勤務先は、新潟県燕市立分水中学校です。

教科は保健体育、趣味はバスケットボールとモダンダンスです。教職に就いて32年が経ようとしています。学生証が届いて「学生割引」が得か「〇〇歳以上の特典」が得か…ワクワクしながら学生生活を楽しんでおります。

先日の話ですが…今、地球上で猛威を振るっているウイルスに対して、切ない顔をしている生徒と話をしました。「人類は、今こそ勉強する時だね。」と！地球が誕生して約46億年！？ウイルスは40億年前頃から地球に存在していたとも言われています。人類の誕生なんて、500万年前とも400万年前とも言われていますが、所詮ウイルスには及びません。ではなぜ人類は頑張れたのか。それは知恵があったからウイルスに対抗できたのではないのでしょうか。「今こそ勉強し、ウイルスに立ち向かい。今こそ身体を鍛え、免疫力を高め。今こそ人類は国を超え、地域を越え、手を携えて協力しなければ。」と言う壮大な話をしました。生徒に勉強を求める前に、

私自身が勉強をする必要性があることを実感しました。

私がこれまでに取り組んできたこととして①主体的・対話的で深い学びの充実のための授業改善・授業研究。②働き方改革に反する部分もあるのですが、部活動指導。③PTA活動・地域・保護者との連携による協働。④職員とのコミュニケーションなどをあげています。そして私自身考えていることのひとつで…現在教育界で言われている「教師は学校で育ち、

独りでは育たない。」という言葉があります。また、「教師は学びの専門家」である。ととらえ、自分を磨くために今年度の入学に至りました。

大学院入学に際して、パソコンも大の苦手で、若い頃よりダウンしているものも多く、つらい部分もあります。皆さんの足手まといにならないように、ついて行きたいと思います。よろしくご指導願います。



## 加藤 真由 かとう まゆ

この4月からミドルリーダー養成コースに入学しました、加藤真由です。福井大学教育学部附属特別支援学校で養護教諭としております。現任校では、これまでの研究に基づいて「生活

教育」を実施しており、学校を含む子どもの生活すべてを教育の対象とすること、教科・領域を合わせた枠組の教育課程や、異能力・異年齢での集団編成、個に応じた指導・支援プランの活用、小学部から高等部までの一貫教育など子どもの育ちをていねいに見取る環境や文化が根付いている学校です。

「生活教育」と保健教育で大事にしている学びは似通っているところが多くあり、これまで養護教諭として生活教育にどう貢献していくかを考えて実践を重ねてきました。迷った時や自分の考えを整理したい時は、教職大学院を修了された職場の先輩方や大学の先生方が力になってくださり、これまで何度も助けられてきました。大学附属の学校という恵まれた環境にいる間に、これまでの実践を省察し意味づけし直したい、先輩方のように自分も学校の研究や教員のコミュニティ作りに貢献できるようになりたいと考えるようになり、教職大学院での1年履修を希望しました。

私自身の歩みですが、結婚を機に福井県で再就職し、福井に暮らして12年になります。福井に来るまでは4年間東京都の高等学校で養護教諭として勤め

ており、東京での4年間で教員として社会人としてのスタートでした。出身は兵庫県の神戸市で現在も実家は神戸にあります。といっても、生粋の神戸っ子という訳ではなく、小学校高学年までは父の仕事の都合で、大阪、京都、東京、などいくつかの都市に住みました。

それでも、「出身は？」と聞かれると、「兵庫県の神戸」と答えます。郷土愛がはっきりしなかった私が「神戸が好きだな」と思うようになったのは、青春時代を神戸で過ごしたことはもちろんですが、小学校6年生で神戸で経験した阪神大震災の影響が大きかったと思います。復興していく神戸の街を誇らしく感じたことや家族や地域の人との絆を強く感じたことなどが私の郷土への愛着を形成したのだと思います。取り組む課題が大きいほど、それを乗り越えようとする協働で得た絆や学びは、その後の人生に影響を及ぼすものであることに改めて気づかれます。

今回コロナ禍での休校期間で、あの震災後、学校が休校だった期間を思い出しました。相互交流が分断され、非日常の事態が続き、子どもたちは学校で友達と学ぶことや遊ぶこともかなわない。それでも、自分の行動が社会への貢献になることなど、子どもたちはこの状況の中でも学んでいると感じています。それは我が家の子ども達（小5・小2・年長の3人姉弟）も同様で、それぞれの発達段階なりに今の事態を理解し、遊びや勉強を工夫している姿や感染症予

防のルール作りをしている姿に、子どもの逞しさを感じます。福井のニュースに耳を傾け「福井は、全国的に見て頑張っている県だ。」「福井は雪で出られんこともあったから（家で過ごすことは）大丈夫や」「友達に会えなくてさみしいのは、私だけじゃない」などと話す様子からは福井への愛着や日常の暮らしへの思慕を感じます。そして、私自身の中にも子どもたちが育つ福井を誇りに思う気持ちや、この状況で子どもたちと何をどう学んでいこうかという新たな課題へ挑戦する気持ちが生まれています。このコロナ禍の課題を乗り越えようとする中で得られる学びがこれからの生活や人生にどう影響をする

のか…しっかりと見つめて考えていきたいと思いません。

本校には「くらし」という授業があります。現在と将来の生活の充実を目指す生活教育の核になる学びを扱う授業です。非日常の今だからこそ、日々のくらしから始まり、現在や将来のくらしにつながる子どもの学びや実践を大切にしていきたいと考えています。短い期間ではありますが、大学院での学びを通して多くの方との縁につながる、有意義な1年にしたいと思えます。どうぞ、よろしくお願ひします。



## 西川 くるみ にしかわ くるみ

はじめまして。今年度からミドルリーダー養成コースに入学いたしました、西川くるみと申します。大学卒業後、新卒で現在の職場、カリタス幼稚園に務め、一旦退職しましたが、娘

もこの幼稚園に通わせ、もう少し大きくなってからは自分が復職して現在に至ります。職場の雰囲気や環境に恵まれ、幸せなことです。復職してからは8年目になりますが、副担任としてサポートする立場から始まり、勤務時間の延長、主担任を任されるようになり、徐々に負荷を上げつつ、今年度は教職大学院での学びが加わり、自分の生きがいとしての仕事ますます充実していくと希望に満ちています。ひとりひとりが大切にされ、自分の持っているよいところを存分に発揮して人生を歩めることを目指して、日々保育にあたっています。このところの関心事としては、育てなおしのいらないどっしりとした幼児期の土台作りを目指しています。

カリタス幼稚園は、神奈川県川崎市にあります。東京から多摩川を渡った対岸で、自然豊かな環境です。カリタス幼稚園は、カリタス学園という一貫校に属する幼稚園で、異年齢混合クラス編成で年長・年中・年少児が同じクラスで生活し、モンテッソーリ教育を土台にした保育をしています。モンテッソ

ーリ教育は、ざっくりというと子どもの自ら育つ力を大切に、自立と平和を目指す教育です。様々な教具を思い浮かべるかもしれませんが、子どもが自己選択と集中を繰り返しながら成長する姿を、園生活全体をとおして目指しています。現在は新型コロナウイルスの影響により、3月より休園が続いており、私もリモートビューでのおたより作成や、LINEでの会議等を行いながら、出勤を減らして園児とのつながりを持てるような発信を手探りで行っている状況です。緊急事態宣言の延長を受け、まだしばらく続きそうです。

カリタス学園からはこちらの教職大学院に各校種から通わせていただいております。私も幼稚園からこちらに通う3人目として学園の教育に使命を持って関わっていかうと思っています。日々情熱をもって仕事にあたっているつもりではありますが、思いを言語化することはとても難しいです。自分自身の思いや考えを、これまであまり深くお話する機会がなかった地域や他校種の先生方との交流をとおして豊かに広げていくために、教職大学院での省察の日々に期待しています。

予測困難な時代を切り開く子どもたち、という言葉がどこか遠くではなく、差し迫った課題だと痛感する状況の中で、早速2度にわたるカンファレンス

準備会に参加させていただき、院生の方々の様々な課題意識や、自分自身の思いに引っ掛かる言葉の数々に触れ、大いに刺激を受けたところです。点と点がつながるように、自分の言葉となって語れるようになりたいと思っています。特に新型コロナウイルス感染拡大防止のために変革を余儀なくされる学校の対応など、様々な情報交換がタイムリーにでき、すぐに生かせる様々な気づきがあり、ここに集う先

生方の熱意と行動力に圧倒されております。登校できない中で、学校の価値そのものが厳しく問われかねない状況の中で、確かにその価値を感じられる実践の数々を感じることができました。この困難を乗り越えた後に見えてくる課題もたくさんあるかと思えます。皆様との交流をとおして自分自身の課題を捉える目を養っていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



## 菅野 多岐子 かの たきこ

今年度より2年間、ミドルリーダー養成コースで学ばせていただきます。よろしくお願い致します。現在、大学卒業後3年間の講師経験を経て、東京都の公立中学校教員となり

14年目を迎えました。

私には「こんなことをしてきた」と言えるような大きな研究や発表はありません。しかし、子供が好きだという思いと、人との出会いに恵まれた教員生活であると言い切れることが私の誇れることだと言えます。

ここでは「人との出会いに恵まれた教員生活」について少しお話をさせていただきます。なぜなら、ここまでの出会いが繋がって今があると心から思うからです。

新卒後、講師として赴任した学校での先生との出会いが、今回の教職大学院入学につながりました。ここでは先生方の知識の量の多さや指導法に大変影響を受けました。授業に参加をさせてもらう度に、私自身が知的好奇心を刺激され、「何て楽しい授業なのだろう。いつか私も生徒と先生が一体となって、楽しそうに授業をすることのできる先生になりたい。そのためには何としても教員採用試験に合格したい。」と強く思ったことを未だに覚えています。

その後、初任校では生徒との接し方、保護者対応の仕方、人前で話す際の基本、問題解決への道筋の立て方や同僚の先生方との連携の取り方等を基

礎から学びました。それが今の私の土台となっています。

また2校目は大規模校で、横のつながりを持つことの重要さと大変さの両方を学びました。生徒と接するときも同様です。大人数の生徒に対し、いかに明確で簡潔な指示を出すことができるかということ念頭におき、伝え方を常に意識した生活でした。そこで出会った先生に、人を引き付ける話し方がとてもお上手な方がいました。ある保護者会で、その先生がいじめについて話をした時です。200を超えるその場にいた全員を、一瞬にしてシーンと緊張感のある空気感に変化させたのです。決して、きつい言い方でも怒鳴るわけでもありません。しかし、その場にいた大多数を引き付けるだけの話の内容や言葉の選択があったのです。たった一瞬でその場の空気を変えるには、思いついた言葉ではできません。常にそのことについて、自分の考えとそれを伝える手段を兼ね備えている必要があるのです。この時以来、その先生の考えを共有する機会を多くとるようにしていました。そして、話をしていると普段の何気ない会話の中にも常に根底に生徒のためという思いがあることに気づいたのです。その出会いが現任校での生活に通じています。

現任校は施設一体型小中一貫校で、学校行事は合同で行います。小学1年生と中学3年生がともに活動する中で、どのように伝えるのが全校生徒のにとってベストなのかということ念頭において準備する生活は、私の中で新たな実践課題です。また、その

際になくてはならないのが教員同士の連携です。自分自身が年齢を重ねてきたこともあり、職員室での立場が中間層になりました。先生方と意思疎通する大切さを自分が学年主任の立場になってより感じるようになったのです。

先程、初任校で教員の基礎を教わったと書きましたが、日々の生活の中で見本を示してくださるような先輩方でした。わざわざ教えるのではなく、私自身に考えさせて、自分が考えた通りにまずはやってみなさいと背中を押して下さったのです。それ故に、自分の考えを持たずに相談に行くと、「あなたは どうしたい？ どう考える？」と問いただされます。その経験を経て、私はいつしか「こう考えるけれど、 どうだろうか？」という相談の仕方に変って きました。そして、その考えには根拠もつける ようになっていきました。それが省察に通じていた のではないかと思えます。



## 大菅 暢子 おおすが のぶこ

今年度より教職開発専攻ミドルリーダー養成コースでお世話になることになりました。2年間よろしくお願い致します。長年公立高校に勤務していましたが、昨年度より中高一貫校である奈良女子大学附属中等教育学校で働いています。専門教科は英語です。

昨年初めて、福井大学で開催されたラウンドテーブルに参加させていただきました。小学生の時に臨海学校で若狭の海を訪れて以来の福井への訪問に当時を懐かしみながら、また旅に出るときの高揚感に似た気持ちを持ちつつ京都から福井に向かう電車に乗り込みました。小学校時代教員にはなりたいたもなれるとも考えていなかった自分が、いつの間にか教職に就いている、その時の流れの不思議さを感じながら会場に向かったことを覚えています。

これから教職大学院での2年間で多くの方と出会い、その出会いからあらゆることを吸収していきたいと非常に楽しみにしています。さらには、そこから今までの自分にはなかった考え方や捉え方、知識を学び、私自身がその学んだことを実践していくとともに、私の大切な人たちに伝えていけたらと意気込んでおります。

そして、それぞれ考え方の異なる先生方との連携の中でその人の考え方を理解し、互いに良い面を引き出し合ったり、補い合ったりしながら、生徒のために心を砕く時間を惜しまず協働できる仲間作りをしていくための手段を見つけていけるよう精進していきたいと思えます。皆様、よろしくお願ひいたします。

会場では日本全国から来られた先生方が生き生きと自らの教育実践を語られる姿に大変驚き、刺激を受けました。同じ教員として働いてきたはずなのに、まるで今まで見たことのない人達が住む別世界に来た、そんな感覚にとらわれたのです。それと同時にラウンドテーブルへの参加は、新採用から現在に至るまで自分の教員としての道のりを振り返るきっかけを与えてくれる出来事となりました。

何も分からないまま初めて教壇に立った山あいにある女子高での新採用時代、その後赴任した実業系高校での戸惑いの日々、その後の大規模校での勤務。その時々でそれなりに忙しく、ただ目の前にあるやるべきことをこなすことに明け暮れていた日々でした。改めて考えてみるといつも大きな学校という組織の中で、周囲から求められるものをこなすことに専念し、自分の教員としての核を作ることを忘れてしまっていたような気がします。

ラウンドテーブルがきっかけとなり、縁あって大学院で学ぶ機会を得ることができました。久しぶりの学生生活に心躍る気持ちで一杯です。現在まで教職に就いているにも関わらず怠っていたことは数えられないほどあります。この2年間で世界の教育関係の文献を読み、様々な校種で働く先生方と学び合い、今後の教員生活に生かしていきたいと願っています。

それと同時に正直のところ、期待を上回るほど不安の方が大きくあります。教員としての仕事をこなすだけでも日々精一杯の自分が、大学院生としてさらに自己研鑽の時間を確保し、自分の学びを周囲に還元していくことができるのか。

今回大学院で一緒にさせていただく先生方には、同じ志を持って学ぶ同志として勝手ながら親近感を感じております。前述のように期待と不安でいっぱいなのですがどうぞよろしくお願いいたします。



## 岡山 佳耶 おかやま かや

初めまして。今年度より、福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました岡山佳耶と申します。福井大学教育学部

附属幼稚園の所属で、まだ子どもたちには会っていませんが5歳児担任をしています。実は、附属幼稚園に赴任したのはこの4月からで、これまでは福井県高浜町の公立保育所で6年間保育士をしておりました。現在は大学宿舎を借り、福井市での新生活をスタートさせています。

私は実年齢より若く見られがちですが、一応、幼児教育には6年携わり、現在26歳です。しかし、一般的にミドルリーダーと呼ばれるのは経験年数で言うと11年～20年、年齢的には30代40代のキャリアの方です。私はそのどちらにも当てはまらない、規格を全く無視して入って来た新参者です。説明会や受験の時は周囲から、「この人ミドルリーダー養成コース？間違えているんじゃない？」と思われる気がして、勝手に肩身が狭いとも感じていました。また、附属幼稚園への赴任に関しても、高浜町ではこれまでに前例が無く、初めての試みでした。

なぜ、このような運びになったかという、高浜町の公立保育所の保育実践研究がルーツとなります。私は実践研究グループの一員で、子どもの主体性に注目し、5年間活動してきました。このグループは若い世代の保育士で構成されており、管理職や主任級

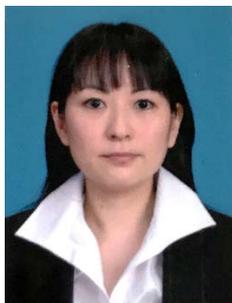
からのトップダウンの形ではなく、底上げしていく形で保育を進めています。キャリアや年齢がリーダーの資質そのものに相当するのではなく、挑戦したい、変えていきたいという実践に対する意欲や態度が大切なのではないかという考え方です。もちろん、それだけではリーダーとして未熟な部分もあるので、バックアップを受けながら、責任感と使命感を持って活動しています。その実践研究の助言者である、福井大学教職大学院の岸野麻衣准教授との出会いが、教職大学院の存在を知るきっかけになり、また、同じ機関で県内の幼児教育の先進である附属幼稚園に勤務する決意に繋がりました。その為、一般的なミドルリーダーの枠からは少し外れた未熟者ではありますが、様々な方から背中を押され、新しい環境に飛び込むこととなりました。

このような流れの中、今の私があり、2年後には高浜町の公立保育所に戻る予定です。最終的な目的は、高浜町の保育に教職大学院と附属幼稚園での学びを返していくことですが、その時が来るまでの日々は、自分のスキルアップと附属幼稚園の保育の質の向上に努めたいと思っています。

今年度の附属幼稚園の研究テーマは「～つながりが育む学びの深まり～出会い、気づき、好きになる」。これを私自身に重ね、感染症の問題など、色々と悩ましさはありますが、教職大学院での皆さんとの出会いや繋がりを大切に、“実践”を起点として様々な

な思いや考えに触れ、高め合っていたらと思います。

素敵な学びの場を与えていただいたことに感謝し、謙虚な姿勢で積極的に学んでいくことを自分に誓っ



## 前田 美知恵 まえだ みちえ

初めまして。今年度より教職開発研究科・ミドルリーダー養成コースに入学しました前田美知恵と申します。勤務校は足羽高校です。大学院に興味を持ったのは、福井大学連合教職大学院の卒業生である初任校（敦賀高校）の英語科の先生や現任校（足羽高校）の校長先生から大学院のお話を聞き、説明会に参加したことがきっかけでした。昨年度より、勤務校で教育相談を担当することになり、様々な生徒と接する上で、教育相談に関する専門的な知識を学び、他校の事例等も参考にしながら、生徒へ適切な指導をしていきたいと感じたことで、他校の先生方と実践を共有する場としての大学院への興味が強まりました。また、本年度より英語科の主任を務めることになり、若手をサポートする中堅教員として、しっかりと自分の勤めを果たさなければいけない。そのためには、大学院で自己の実践と省察を繰り返しながら、教員としての資質能力を確実に身に付けることが必要だと強く感じ、入学する決心がつきました。

### ①英語科教員としてこれまで取り組んできた教育実践（研究）の歩み

学校現場では、いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実・ICTの活用など諸問題への対応も必要になってきています。新学習指導要領は、グローバル化や情報化、少子高齢化など変化する社会の中で、学校が社会と連携・協働する「社会に開かれた教育課程」です。そのため、子どもたちが、知識・技能をしっかりと身に付けた上で、思考力・判断力・表現力を高め、学びに向かう力・人間性を涵養するための指導法について、英語科教員として模索して

て、自己紹介とさせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します。

きました。授業内では、単語テストを定期的にし、基礎力を身に付けた上で、学校行事・語学研修や国際交流活動に於いて、授業で学んだ知識・技能をどのように生かせるか、体験することで「自ら考える」機会を与えるようにしてきました。体験のあと振り返りを授業で行い、上級学年になった際には、授業においても、生徒主体の活動を増やし、生徒が役割を分担して探求的な学びを進める活動を取り入れるように努めてきました。その際、教員はファシリテーターとして、生徒を良い方向に導かせることが大切だと感じました。

### ②教育相談担当として勤務校においての実践・研究のこれまでの歩みと現状

平成31年4月より教育相談に携わるようになり、学校のコーディネーター的役割を担うようになりました。Q Uを行い、クラスの状態を診断すると、クラスの雰囲気良く、学習に意欲的であれば、クラス全体の成績も上がります。教育相談担当として、校内事例研究会等を行い、クラスの雰囲気を良くするためには、先生と生徒のタテのつながりだけでなく、生徒と生徒のヨコのつながりを強くすることが必要であることに気づきました。クラスの雰囲気が、学習に前向きでないと、ペア・グループ活動が成り立たないだけでなく、学習に対する意欲も全体的に低下してしまいます。「教えることは学ぶことである。」共に学ぶことで学習の定着を促し、学びを深めることができるということに気づきました。

### ③今後の課題

大学院で高度な専門的能力と優れた資質を有し、学び続けることのできる教員として成長し、教育相談担当・教科のリーダーとして先導する力をぜひ習

得したいと考えています。また、勤務校には、不登校・発達障害を持つ生徒や外国籍の生徒がおり、そのような生徒に対する指導に苦勞しております。その問題を解決するための専門的な知識を、他者と情報を共有しながら大学院で身に付けていきたいと思っております。更に研修終了後は、教科の核となる教員として、また学校全体をコーディネートする教育相談担当として、教員が一人で抱え込まないよう

サポートすることで、業務を分担し、余裕を持って教材研究等に励むことで教員一人一人の資質・能力の向上を期待できると考えています。

お忙しい大学院の先生方や他校の先生方への感謝の気持ちを常に忘れず、謙虚な気持ちで学びを深めていきたいと思っております。これから2年間何卒よろしくお願い致します。

## 福田 亘哉 ふくだ のぶや



初めまして、今年度より福井大学連合教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学しました福田亘哉です。どうぞよろしくお願いたします。現在、私は認定こども園福井佼成幼稚園で5歳児の担任をしています。保育者になる夢を叶えて3年目を迎え、自分の保育観を探して歩み始めたところです。初心者マークの私は、一緒に組んでくださった先生方や、周りの先生方に助けていただいていた真似をし、先輩にお任せで保育を進めることも多かったです。しかしこれからは、「自分だったらこうする」という保育を見つけていきたいと思っています。

私が保育士を目指したきっかけは、5歳の頃に見ていただいた先生に憧れをもっていただけからです。その先生は、とても厳しい先生で、怒るとすごく怖い先生でした。しかし、褒めてくれる時はたくさん褒めてくれて、遊ぶ時は一緒に全力で遊んでくれました。そんな先生が大好きで、5歳の頃「僕は先生になりたい」と言って、卒園しました。何事も挑戦することが好きで、小学生の時にはバレーボール・吟舞・バドミントンを習い、中でもバドミントンは中学校まで続けました。小さい頃から音楽が好きで、父がトランペット演奏をしていたこともあり、高校では吹奏楽部に入部し、トランペット奏者として活動しました。他にも合唱コンクールで、習ったことのないピアノを独学で練習してピアノ伴奏をし、勝山市の成人式でも伴奏を担当させていただきました。ト

ランペットとバドミントンは、今でも続けている趣味の1つです。高校卒業後、大原医療保育福祉専門学校保育科に入学し、保育について学びました。クラスの学級長、学校祭の総団長、バドミントン部の部長に任命され、保育のことだけでなくことにチャレンジしました。その中で、人間関係の難しさや大勢をまとめる厳しさも学んだ2年間でした。まだ、これらの経験をいかせている実感はないですが、いつかこれからの保育や人生に生かしていけたらいいなと思っています。

さて、本園が取り組んできた保育改革は5年目に突入し、主体性を育む保育の軸である『遊び込み（なかよしタイム）』と『振り返り（みんなのじかん）』で培われた子どもたちの力が、ここに来て多くの場面で、発揮されるようになった事を実感しています。例として挙げれば、去年の発表会で取り組んだ、『スイミー』の劇作りの流れです。『スイミー』の絵本から、振り返りと活動を進めていくと、子どもたちはスイミーの物語より生き物に興味を持ちました。「本物の魚が見たい！」という子ども達の思いを汲んで、実際に内水面センターへ出向いて魚に触れました。他にも子どもたちが興味を持った魚や生き物は、YouTubeや図鑑で調べました。こうした『体験型保育』を取り入れることで、「イソギンチャクってこう動くよね!」「イカなら、もっと長い足を作ろうよ」と、振り返りの時間での提案や疑問を話し合い、原作とは全く違った『スイミー』の劇ができました。劇を作り上げるまでには、子どもたちの姿に合わせて何度も台本を直したり、子ども達の興味

に寄り添った提案をしたりすることは本当に難しいことでした。しかし、この『体験型保育』を取り入れたことで、活動を「やらされている」という子どもたちの姿がなくなり、「自分たちの活動」として、本当に楽しそうに取り組む姿が多く見られるようになりました。今後も、様々な活動にこのやり方を取り入れて、一つ一つの活動の学びを深いものにしていきたいと思っています。

コロナ感染対策の保育を求められる時代になり、集団で散歩や園内行事が出来ない日常が続いていま

す。その中でも、『子ども主体』で、今までできなかった新しい事、今まで見ることでできなかった新しい子どもの姿を見つけることができるいい機会だと思います。この時期だからこそ出来るワクワクする体験の取り組みや、コロナ対策を踏まえた上での保育の不安を、教職大学院で話題提供させていただき、さらなる保育の質の向上につながる機動力になりたいと思います。自分の保育観の確立と、園全体の推進力になるよう一生懸命頑張ります。



## 森川 禎彦 もりかわ よしひこ

「指導者は選手の未来に触れている」

これは、かつて UEFA（ヨーロッパサッカー連盟）のテクニカルダイレクターを務めたアンディ・ロクスブルグ氏の言葉で、育成年代の選手に関わる指導者が、無限の可能性を秘めた選手の将来を左右する大切な役割を担っているということを示したメッセージです。

私は、10年以上中学校でサッカー部の顧問をしています。若い頃は勝利至上主義とまではいかなければいけません。目の前の子どもたちを勝たせるために、厳しく言うべきことは言うというスタンスでした。しかし、そのために子どもたちに向けて発する言葉が高圧的なものになってしまったことも多々ありました。その結果、「先生に怒られないようにプレーをする」というような私の顔を伺いながらプレーをする子どもたちを育ててしまっていたのではないかと思います。当時の子どもたちには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

そのスタンスを大きく変えてくれたのが冒頭の言葉です。顧問3年目に日本サッカー協会の指導者資格を取得するための研修で出会った言葉でした。その時にこれまでの指導を振り返るとともに深く反省しました。子どもたちの大切な3年間は、彼らにと

って、これからも続く未来に可能性を見出すものでなければなりません。この言葉に出会う前の私は、子どもたちの「今」しか考えておらず、自分本位で狭い視野でしか物事を捉えられていませんでした。それからは、部活動にしても、生徒指導でも、授業でもこの言葉を大切に、目の前の子どもたちの未来を見据えながら「今」何をすべきかを常に考えて接するようになりました。例えば、部活動では、答えを一方向的に与えるのではなく、「なぜ上手いかなかったのか」「どうすれば上手いくなるのか」を子どもたちに問い、子どもたちと共に考えるような指導に転換していきました。そうすると、子どもたちは驚くほどの成長を見せてくれて、子どもたちと過ごす「今」が、より充実した豊かなものになっていくのを感じました。

冒頭の言葉は、学校現場に置き換えるならば「教師は子どもの未来に触れている」という言葉になるのかもしれませんが。子どもたちの「過去」「現在」「未来」をトータルに考えて、予測困難な未来を強く生きていく力を育てていくことが教育者の使命だと考えます。

さて、現在、福井大学教育学部附属義務教育学校で4年目の勤務を迎えました。赴任から7年、8年、9年と3年間担任として持ち上がり、また、本校の特色でもある学年プロジェクトを担当し、ロングス

パンの学びを通して子どもにどんな力がついていくのかを間近で感じることができました。この3年間で私が学んだことを短く表現するならば、「子どもたちの学びと教師の学びは相似形である」ということです。本校の校訓「自主協同」のもとで子どもたちは、授業を始めとした様々な教育活動の中で、自律的にかつ協働的に学んでいます。その一方で、教師も同僚と協働しながら自律的に子どもたちの学びを支えています。教師一人一人の自律性と教師集団の同僚性とが相乗的にかかわり合っ、教師間の「探究するコミュニティ」となり、協働関係が築かれていく学校文化が本校で長年に渡り培われています。今回、コロナ禍の中で学校に登校できない子どもた

ちへの自宅での課題を考えたときも、プリント学習のみに終始せず、どうしたら探究的な学びにつながる自宅学習になるのかを話し合い、各教科で工夫しながら実践しています。休校が長く続く中で、改めて学校の必要性や「学力」とは何かが問われていると感じます。

一年間教職大学院で学ぶにあたり、予測困難な未来を見据えた教育の在り方や、さらに充実感と達成感が生まれる研究組織にするための教師コミュニティの在り方を具体的に考えていきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひ致します。



## 小林 正尚 こばやし まさなお

私は、一昨年、県総合教育研究所の「マネジメント研修」を受講させていただき、更に昨年度は、事前履修として教職大学院の夏

季、冬季の集中講座、ラウンドテーブルに参加させていただきました。今年度より1年間という短い期間ではありますが、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、福井県小浜市の小浜中学校に勤務し5年目となります。技術科の教員として、主に地元の中学校を中心に勤めてきました。昨年より教務主任として、年間、月間の行事、毎週の授業時数や日々の日課の管理を行っています。本校には時刻を知らせるチャイムがなく、生徒たちは自分たちで時間を管理し生活しています。登校時刻、授業開始時刻を守り、大変落ち着いた雰囲気です学習や運動に取り組んでいます。また、本校は全ての行事に異学年の縦割り活動を取り入れており、マラソン大会、年2回の合唱コンクール、体育祭等は全て縦割りで行っています。活動を通して生徒たちの自己肯定感が高めながら、しっかりと伝統が受け継がれています。

一昨年、県総合教育研究所の「マネジメント研修」を通してマネジメントについて学びました。学校を広い視野でとらえ、考え、作っていく方法を学び、この年は、生徒指導担当として「小中接続」について取組を進めることができました。中学校の紹介資料を小学校に配布したり、中学1年生が出身小学校を訪問し、中学校生活の不安を解消したりする取組を始めました。また、体験入学では、小中の交流活動を取り入れ、入学前に新しい人間関係を築ききっかけをつくりました。生徒指導、特別支援担当が各小学校の授業を参観し、新入生の情報交換をする取組も始めました。昨年度は教務主任として、授業研究の体制について提案をしました。本校は、異教科、異学年部会による授業公開グループをつくり、授業研究を進めていますが、教科部会の充実のため、短時間の教科部会、授業互見の実施を進めました。しかし、これらの取組は自分の狭い知識や経験をもとに進めてきたものであり、多くの改善すべき課題があります。是非この教職大学院での学びをもとに生徒、職員にとって、よりよい実践にしていきたいと考えています。

今年度は、一昨年から始めた小中接続の取組を継続するとともに、校下の小学校とともに「9年間を

見通した学び」について研究を進めていきます。両校でどのように研究の方向性の統一し、研究体制、研究方法の立案をしていくか、さらに各自が日々の実践へどのように落とし込んでいくのか等、課題も多く、皆様の多面的な視点からのご意見を参考ににより研究にしていきたいと考えています。

現在まで教員生活を通して、自分の実践を振りかえったり、また実践と理論を結びつけ意味づけしたりするようなことを疎かにしてきました。今回、教職員大学で学ばせていただく機会をいただき、様々な文献を読んだり、様々な立場の実践をお聞きした

りすることができます。様々な立場からのご指導、ご助言をいただきながら、自分自身の資質の向上や取組の改善につなげていきたいと考えています。お世話になるスタッフの皆様、どうぞよろしく願いいたします。

最後になりましたが、この教職大学院で学ぶ機会をつくってくださった、県教育委員会、市教育委員会、管理職、同僚、そして家族に感謝し、この1年を私にとって実り多き1年となるよう頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。



## 白崎 賢一 しらさき けんいち

現在の勤務校である越前中学校は海岸沿いの高台にあり、天気の良い日(さらに条件をつけるならば降雨後など湿度の高い日)には燃えるような真っ赤な夕陽が水平線に沈んでいく素晴らしい景色を思い存分眺めることができます。また、残念ながら今年は無観客(生徒)でしたが、春になると校舎の周りを桜の花が華やかに埋め尽くします。これを書いている今(5月初旬)は、夕陽が沈んだ後イカ釣り漁船の漁火が灯り始める頃です。夏は車の大渋滞も起こる「越前大花火大会」で幕開け、大勢の海水浴客で賑わいます。冬は言わずと知れた越前ガニの季節。カニ以外の海産物も豊富で、それらをもてなしの中心とする旅館や民宿など観光業も盛んです。また、海の幸だけでなく山の幸にも恵まれ、間近には青々とした森林、一山越えれば田園地帯が広がっているなど多くの自然に恵まれた素晴らしい地域です。

しかし当然ながら課題もあり、その中でも一番の課題が人口減少です。それに伴い小中学校の児童生徒数も激減しています。越前中学校の歴史を紐解くと、ピーク時には500人近くの生徒が在籍したこともあるそうで、それだけの大人数を収容していた校舎は改修を繰り返して現在も使われており、例えば

各教室にはそれぞれに学習室(別名「空き教室」)が複数ありますし、理科室や調理室、美術室などの特別教室専用の特別棟が別棟で併設されています。体育館はギャラリー付きでフロアはバレーボールコート4面分の広さがあります。これだけ広大な施設内を、一昨年度、昨年度と2年連続で過去最少となる全校72名の生徒が元気に走り回って!!いました。今年度は若干増え77名となりますが、学級数が開校以来、初めて全学年単学級となったことで教員数が過去最少の10名となってしまいました。

このような「素晴らしさ」と、「危うさ」の同居する越前中学校に赴任して早3年が過ぎました。いづれも教務主任として学校運営の中心として働いてきたつもりでした。1年目は、転任してきたばかりということもあったり、大雪もあったりで、必死に何とか乗り切ったあつという間の1年でした。2年目は、大好きなバレーボールの部活動主顧問に復活。休みの日にも子供達と一緒に汗を流し充実した1年間を過ごさせてもらいました。この頃はこんな調子で毎日が過ぎていくことが当たり前になっていて、この歳で再び大学で学ぶことになるなんて思ってもいませんでした。そして3年目、私がこうやってこの原稿を書くことになるいくつかのきっかけがありました。

まず一つ目は、昨年度受講した県の「マネジメント研修」です。それまで、「前述のような生徒数減少は世の流れで仕方のないことだ。」とと思っていましたが、「状況改善に少しでも貢献できることが私にもあるかもしれない。」と思えるきっかけとなりました。特に印象に残ったのが淵本先生の「ミッション」と「ビジョン」のお話でした。教務主任という学校運営の中心となるべき立場にありながら、それまで本当の意味での学校運営をしてこなかったと深く反省させられました。ただ、そのお話を聞いた後も大学で学ぶことに関心はなく、むしろ「現場で働きながら、しかも文章化しまとめていくなんで私にはとてもできない。」とっていました。特に、教員になってこれまで、授業や学級経営、生徒指導、部活動など目の前にあることを日々こなすことに精一杯で「研究」とは程遠かった私にとって、今更大学で学ぶなんて全く違う世界の話だと思っていました。ところがある時ふと、元同僚の先輩先生(現在は小学校の校長先生)が「面白いぞ。入ってみんか。」とおっしゃっていたのを思い出し、連絡をしたことが二つ目のきっかけでした。大学での「学び」の進め方を知ることができ、少し興味が湧いてきました。とはいえ、そこでもそれほど強い気持ちになったわけではなく、「ものは試し」の軽い気持ちで「夏期集中講座」に参加したことが三つ目の、そして一番

大きなきっかけとなりました。そこで、これまでの自分自身を振り返り、皆さんと語り合い聴き合う中で、「マネジメント研修」で聞いたお話から得られた気づきや、これまでに何となく思っていたこと、勤務校で行なってきた組織やカリキュラムのマネジメントに関する実践で感じていたことなどが一気に結びつき、さらに深く学びたいと本気で思うようになりました。夏の三つ目の講座が終わる頃には冬の講座が待ち遠しいほどになっていました。また、2月の「ラウンドテーブル」には県内外から大勢の方が参加されていて、そこでも大きな刺激をいただきました。その時には受験は終わっていましたので、選んだ方向性に間違いはないと確信しました。

さて、今回、皆さんと直接お会いできない変則的なスタートとなりましたが、画面を通して語り合うのもこれはこれでありかもしれない。と早速新たな気づきに出会いました。この先さらにどんな気づきに巡り合うかととても楽しみです。ただ、それと同時に、私は「学び続ける教師」と呼ぶにはあまりにもにわかで、いつその意欲が途切れるか不安でもあります。どうかこの意欲が少なくともこの1年だけは持続しますよう、皆様ご協力よろしく願います。

最後になりますが、今回の入学に際し関わってくださった多くの方々に感謝申し上げ、結びとさせていただきます。



## 早瀬 善理子 はやせ よりこ

昨年度、事前履修を経て、この4月より連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました、敦賀市立敦賀西小学校の早瀬善理子です。敦賀西小学校3年目、今年度は5年生の担任と学年主任、生徒指導を担当しております。一昨年前、県の教育研究所で行われたマネジメント研修を受講したことがきっかけで、教職大学院で学ぶことになりました。実は、マネジメント研修は、自ら進んで受講したものではありません。マネジメ

ント研修は、今まで自分が受けてきた授業に直結するような研修ではなく、学校を運営する内容のもので、恥ずかしながら初めて聞く言葉が多く、場違いなところに来てしまった！というのがはじめの感想でした。しかし、研修を受けていく中で、今まで自分が知らなかった学校経営の重要性について知ることになりました。学校を取り巻く様々な環境を的確に把握し、うまく適応していく必要がある、チームとしての学校。今まで、自分が与えられた職務に集中することができていたのは、学校経営が計画的・効果的にされていたからということを知りまし

た。これはもっと勉強しなければならない！と思っていたときに、教職大学院のお話を受けました。いつも仕事が遅く、目の前のことでいっぱいいっぱいの私が果たして大学院の勉強と両立できるのかと不安もあります。どうしようと思っていましたが、かつての同僚であり、尊敬する先輩教員（教職大学院の卒業生）が、「こんないい学びのチャンスはない！絶対行くべき！」と後押ししてくれ、今に至ります。

敦賀西小学校に赴任する前までの学校では、自分よりベテランの先輩教員がたくさんおり、周りに守られ、自分の仕事だけをしていたように思います。

「主任に言われてからする」「困ったら周りが助けてくれる」と、甘い考えでいました。しかし、気づけば自分もベテランと言われる歳で、いつまでも周りに頼ってばかりではいけないのです。そして、敦賀西小学校への異動。敦賀西小学校では、自分より年下の教員が多く、「主任」というこれまで以上に責任ある仕事に就き、若手を引っ張っていかねばならない立場になりました。今まで、周りの先生方がしていたことを思いだし、若手と共に学級経営をしていく。管理職の先生方の動きを見て、自分が今何をすればいいのか、どうしてこの仕事をしているのかということを考えて、若手と話し合いながら動くようになりました。そこに並行して学んだマネジメント研修。学級目標一つにしても、「学校の教育目標がこうだから…」 「スクールプランは…」と、学校長の考えを深く考えるようになりました。当たり前のことかもしれませんが、当たり前のことを、今頃気づいたのです。

教職についてから、20年以上経っていますが、どの学校でも職員・子ども・保護者・地域の方に恵まれて、毎日楽しく仕事をさせていただいています。私には趣味がたくさんあり、プライベートも充実し

ていますが、それ以上に学校にいる時間がとても楽しいです。職員が一つになっていろんなことに取り組むことができる背景には、管理職の先生方が、きちんと学校をマネジメントしてくださっていたからだと思います。学べば学ぶほど、マネジメントすることは難しいという思いが強くなります。昨年1年間事前履修で、たくさんの先生方の話を聞きました。小学校以外の校種や、他県の先生方の話を聞く機会がほとんどなかったもので、どの話もとても興味深く、勉強になりました。今年1年は、さらに深く学ぶことで、レポートやカンファレンスなど大変なこともあると思いますが、今はそれ以上に楽しみの方が多いです。教職員大学院で学んだことを、職場で生かすことができるように、これからもたくさんのことを吸収していきたいです。

「News letter 特集号 vol2」で、教職大学院の花木秀実先生が、「学ぶという明確な目的を持って入学したか」「大切なことは何のためにその職に就くのか（目的）」「何をしたいのか（志）」「何をすべきなのか（使命）」ということを書いておられました。自分は、ここで何を学ぶのか。学んだことを、還元していくにはどうすればいいのかをしっかりと考えていきたいと思います。教職大学院で学ぶことを快く送り出してくださった現職場の校長先生に、「この大変な状況の中で学ぶというのは、とてもよい経験になる。しっかりと学んできなさい。」と言う言葉をいただきました。期待されているというプレッシャーもありますが、精一杯がんばっていきたいと思います。

たくさんの方々との出会いや交流を大切にし、自らの学びにつなげていきたいと思います。先生方、共に学ぶ学生の皆様、よろしくお願い致します。



## 梶川 和則 かじかわ かずのり

今年度より、学校改革マネジメントコース（1年履修）で学ばせていただくことになりました梶川和則と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、一昨年度、福井県教育総合研究所での「マネジメント研修」において、現場での実践を通じた取り組みを行う機会を得ました。「組織マネジメント」では、「人、もの、金、情報、時間」をどうやりくりするのがマネジメントであると教えていただきました。そこで、業務改善や働き方改革の視点から取り組みを進めました。「情報」の視点からは、ICTをいかに業務改善等に活用することができるかを管理職や同僚へ提言し、試行錯誤を繰り返しながら少しずつ変革を行うことができました。「時間」の視点からも、子供と向き合う時間の確保のために何ができるかを提言し、これもまた少しずつ変革を行うことができました。このような実践が行えたのは、管理職の方や同僚の皆さんの理解や力添えなしにはあり得ませんでした。改めて「組織」や「同僚性」の大切さを考えさせられた実践になりました。

昨年度は、教職大学院の事前履修という形で夏期と冬期の集中講座や2月の福井ラウンドテーブルに参加させていただき数多くの学びがありました。そして、今年度からは1年履修での教職大学院における学びがスタートしました。しかし、昨今の情勢により学びの機会が減少するのではないかと懸念していましたが、教職大学院の関係者の方々のご尽力によるオンラインでの学びができていることに心より感謝しております。この対応力とスピード感からも学ぶことが多く、今は「何をするか」ではなく「何ができるか」を見極めながら取り組んでいくことの大切さを実感しました。

「今の自分の実践の背景には、今までの実践が後ろ盾されている」教職大学院での学びは、「実践と省察」と昨年度の事前履修から理解しました。そこ

で、今の自分を支えている教育観の軸に関わる心の拠り所について述べてみたいと思います。私は、採用後、小学校4校（19年）、中学校2校（9年）行政（2年）を経験し、この4月からは5校目の小学校に新任教頭として赴任しました。そのような中、自分の教育観を見直し改める機会が数多くありました。

20代、自分の価値観を拠り所にしながら突っ走っていました。しかし、その反面生徒指導に関する指導力に欠けていたと思います。「生徒に嫌われない」その思いが最優先され今思えば生ぬるい生徒指導であったと思います。そんな時、先輩教員からかけられた言葉。「今、生徒から嫌われてもかまわない。その指導は生徒のことを考えているからできること。20年後、30年後にありがとうと言われる指導を今しなければならぬ」子供たちの未来に向け、教員である自分に今何ができるかを考えさせられた一言でした。

40代前半、社会教育の業務に携わっていた頃、主催事業などの企画・運営を行っていました。その時の所長の言葉。「学校は、朝になれば子供が学校へ来てくれる。しかし、社会教育では、企画に魅力がないと人は集まらない。アンテナを高くし、参加する人は何を望んでいるのか、今何が求められているのかを見極めなければならない」教員生活に慣れ始め、謙虚さと学びに向かう面において怠惰になっていた自分を戒める一言でした。

40代後半、約20年ぶりの中学校勤務に戸惑っていました。特に、学年主任としての各学級における生徒指導に関する事案に四苦八苦していました。想定外の事案が多く、思春期の生徒との関りやその背景にある家庭や保護者との関りに頭を悩ませました。不登校生徒も多く日々の家庭訪問や個別対応への対応にも苦慮していました。自分なりに管理職や学年所属教員と相談しながら取り組んでいるつもりでしたが、その時の担任からの言葉。「生徒と面と向き合ったり、家庭訪問で保護者と接したりするなど最前線で指導や対応をしているのは私たち担任です。」

組織をどう動かすか、どうフォローアップできるかなどリーダーとしての資質・能力を考えさせられる一言でした。

同じ頃、例年実施している中学生の海外派遣（オーストラリアでのホームステイ）に団長として2週間滞在しました。滞在中には、オーストラリアの国民性や習慣などを知ること、日本という画一的な社会の中で育ってきた私にとってカルチャーショックでした。そこで、自分の脳裏に浮かんだことは、日本を離れてみて改めて日本の良さが分かるということでした。ふるさとを愛し誇りに思う子供たちを育むためにも、外の社会を知ることが大事だと感じました。

挙げ始めるときりがありませんが、節目ごとに私の考えを再構築させられる機会があったことは、今思えば大変ありがたいことだったと思います。これから始まる教職大学院での様々な方との実践を通じた交流も、さらに今の自分を再構築できる大切な機会と期待しています。今までは自分の実践を振り返ることもなく、その場しのぎだった私に「省察」の学びができることはこれからの教員生活にとってかけがえのないものになると確信しています。また、管理職としての資質・能力を高めるための糧にしていきたいと考えています。「学び続ける教師」であり続けるためにも、今年1年間での学びを大切にしていきたいと思っていますので、どうかよろしくお願いいたします。



## 大野 隆次 おおの りゅうじ

今年度、連合教職大学院、学校改革マネジメントコースでお世話になります大野隆次と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、私は岐阜県羽島市立堀津小学校に勤務しています。全校児童173人、全ての学年が単学級の小規模校です。学校の教育目標は「よく考え、あたたかい心で伝え合い、たくましくやりきる子」です。学校の所在ですが、岐阜県の南西部に位置しています。すぐ近くには、東海道新幹線「岐阜羽島駅」や名神高速道路の「岐阜羽島IC」があり、交通の便がよい環境です。

私は平成17年度に新規採用されてから、今年度で教員生活16年目を迎えます。これまで県内の中津川市立田瀬小学校で3年間、羽島市立中央小学校で3年間、羽島市立小熊小学校で4年間、羽島市立堀津小学校（現勤務校）で5年間、勤務してきました。幸いなことに、この間、全ての学年の学級担任を経験させていただくことができました。

本校での勤務は今年度で6年目を迎えます。今年度、教務主任2年目になります。昨年度は、初めて

の教務主任に加え、学級担任も兼務していたため、多くの先生方に助けていただきながら、両立した一年間でした。今年度は単独で教務主任をさせていただける反面、これまで新規採用からずっと学級担任をしてきたため、寂しい気持ちもありました。今年度は、教務主任として昨年度以上に、学校全体をよりよく運営できるようにしていきたいと考えております。

さて、私がこの連合教職大学院で学びを深めようと考えた経緯を紹介します。昨年12月頃、学校長より、連合教職大学院の話をいただきました。学校のマネジメントについて学ぶということでしたが、正直、何をするのかピンときませんでした。大学院というと、一旦、学校現場を離れ、大学院で、より専門的なことを学ぶというイメージが強くありました。大変、ありがたい話ではあったのですが、時間と労力を費やすことになると考えた私は即答することはできませんでした。

それからしばらくして、連合教職大学院生（当時、最終年度）の方に話を伺うことができました。その中で、一番印象に残っていることは、その方が「機会があれば、もう一度、教職大学院に通ってみたい！」

とおっしゃられたことです。私にとってはとても意外な言葉だったのです。それは、ただでさえ日々の職務が忙しい上に、さらに大学院で学ぶということは、労力が必要だと感じたからです。話を伺う中で、この連合教職大学院は、学校現場を離れず現職のままで学べるということ、勤務校が抱える課題を研究することで、同僚の職員に還元していけるという利点があることも知ることができました。

こうして、連合教職大学院について何となく理解したものの、それでもまだ決心するまでには時間を要しました。出願の期限が差し迫った頃、先ほど紹

介した院生の方の「もう一度、教職大学院に通ってみたい！」という言葉思い出しました。そこには、きっとこれまでにない深い学びがあり、私自身のさらなるスキルアップになると考えるようになり、この連合教職大学院に挑戦しようと決めました。私もこの連合教職大学院を終える頃には、先ほどの院生の方の言葉「もう一度、教職大学院に通ってみたい！」と思えるような2年間にしていきたいです。

連合教職大学院の先生方、院生の皆様には、ご迷惑をおかけすると思いますが、これから2年間よろしく申し上げます。



## 宮口 正樹 みやぐち まさき

今年4月から福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました宮口正樹（みやぐちまさき）です。どうぞよろしくお願いいたします。

福井市の東部、田園風景が広がる場所に立地する足羽第一中学校に勤務しています。私自身は違うのですが、足羽第一中学校は私の両親の母校です。私が小学生の時、夏休みにこの学校のプールで泳いだり、正月には学校の近くで凧揚げしたりしていたことが思い出される、小さい頃からなじみのある学校です。

今年度は、第3学年の学年主任を担当させていただくことになりました。また、女子ソフトテニス部の顧問として、元気でにぎやかな部員たちに負けることなく今年も指導することになりました。

50歳代になり、学年主任など学校組織の運営に関わる業務を任されるようになってきました。それまでは学年主任などリーダーのもとで、学年の一員として日々の実践を積み重ねてきましたが、そのリーダー役を自分が担うようになり、その立場の変化に伴う職責が予想以上に大きなものであることを感じさせられる日々でした。学年主任として学年組織

を動かすリーダーとしての資質・能力が日々問われていることを強く感じていました。学年に所属する先生方に助けられ、日々の実践を積みかさねてきましたが、認識の甘さや対応のまずさなどで問題を複雑化させ、管理職の先生に指導や助言を受けることも少なくありませんでした。教員として、リーダーを任される立場としての資質・能力のレベルアップの必要性を日々感じていました。そんな折、県教育総合研究所のマネジメント研修を受講した者に、教職大学院での1年履修という新たな制度が設けられたことを知りました。教職大学院のことはもちろん知っていましたが、自分にとってどこか縁遠いものと感じていました。また、年齢面でも遅いように感じ躊躇していましたが、教職大学院で学んだ複数の知人の先生方から大学院で学ぶことのいくつかの素晴らしさを教えていただいたことや管理職の先生にも賛成いただいたこと、家族の理解も得られたことから連合教職大学院で新たに「学ぶ」ことを希望しました。

昨年の夏の事前研修に参加し、実践事例や本を読み込むこと、院生の方々とセッションすることで新たな学びを得、日々の実践を違った視点や俯瞰的にとらえることができるようになりました。改めて「学び続ける」ことの大切さを感じました。

連合教職大学院での「学び」で、教員としての自分自身のレベルアップを図るだけでなく、子どもたちや次の世代の学校を担う若い先生方の一助となる

よう、しっかりと学び続けます。再度、どうぞよろしく願いいたします。

## カンファレンス準備会に参加して

### “省察し語り合うこと”で前へ進む

授業研究・教職専門性開発コース3年/越前市武生西小学校 玉村 香奈

午後の部でグループが同じになった K 先生から、「新型コロナウイルスの影響下において、外国の子どもに対する日本語支援でどんなことをしたいと考えていますか。」と問われたとき、私ははっとした。外国の子どもの日本語支援に従事する者として考えているつもりであったが、結局、何をしたいのか問われたときに具体的に何も出てこなかった。言い換えれば、“できること”については考えていても、今自分が“何をしたいか”“どう行動できるか”と主体的には考えていなかったのである。私にそう問うた K 先生は、現在自分が取り組んでいる実践をはずらつと語られ、最後には、「このような状況のなかで不謹慎な言い方であるが、新しいことに挑戦できる今は面白い。ニューノーマルを築いていけたらいい。」と楽しそうに話された。

このときふと思いだした言葉が2つある。1つは、大学院の松木先生 からの「玉村さんは、頭で映像を見ているね。よくもありわるくもあるよ。」（長野県伊那小学校の豚の飼育のドキュメンタリーを見たときの私の感想に対する先生のコメント）、もう1つは、大学職員として働いていたときに上司から人事評価の面談で言われた「もっと動けると思っていた。」である。特に、2つ目の言葉は、退職してから何年経っても頭から離れることはない。今思えば、求められている以上のことに答えようと一生懸命働いてはいたが、それは与えられた・指示された職務の範囲内のことであり、自分の力で課題と向き合い主体的に行動するまでには至っていなかったからだ

と思う。そして今回の新型コロナウイルスの影響下において、頭で後先のことを考えるだけで、結局は主体的に行動していない自分がいることに気づいた。K 先生の問いによって、昔と変わらない自分の姿を否応なしに自覚させられたのである。が、それと同時に、自分の中で沸々と原動力のようなものがわき上がってくるのがわかった。それまで頭であれこれ考えていた自分とは一転し、日本語支援としてこの状況の中でどう行動すべきか、自分が今外国の子どもに対してしたい支援は何かについて考えが動き出した。心が動き出したのかもしれない。

そうなるもたってもいられず、カンファレンス準備会が終わった直後から、現在取り組んでいる外国につながる子どものための学習支援教室の再開へと動き出した。学習支援教室は2月末の学校の休校と並行して休会としていたが、これから学校が動画配信等で授業を進めるのであれば、学習支援教室はオンラインで双方向での支援を再開したいと考え関係スタッフに連絡を取った。それまでにオンラインでの再開について考えていなかったわけではないが、あれこれ理由をつけて先延ばしにしていたのである。本稿執筆段階ではオンラインでの再開にはまだ至っていないが、別の機会にその後の取り組みについて報告したい。

今回のカンファレンス準備会での K 先生からの問いは、私にもう一度主体的に行動するきっかけをつくってくれた。振り返れば、このように語り合う場

は2月のラウンドテーブル以来、約2ヶ月ぶりである。そして、学習支援教室の再開を前向きに考えたのも2ヶ月ぶりである。また、このような社会的距離を保たなければならないなかで、大学院の先生方が率先して、これまでと変わらない形式での合同カンファレンスをオンラインで実現していく行動力と、

これからの教育現場でのオンラインの可能性を示してくれたのではないかと思う。

今回のカンファレンス準備会に参加して、“経験のない不確定な状況のなかで学校を維持し発展させ”ようとする現場の先生方や大学院の先生方の前へ進む力を分けてもらえたことに深く感謝したい。

## コロナ禍の中でのカンファレンス準備会

授業研究・教職専門性開発コース3年/

(福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程) 桑原 寿々奈

新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンライン上での4月の合同カンファレンス準備会となった。紙面上では幾度なく「2030年の社会は予測困難な時代となる」というフレーズを目にしてきた。それが今回の新型コロナウイルス感染拡大により、紙面上だけではなく、そのことがリアルに言えるようになったと感じる。しかし、これはそのような予測困難な時代に投入していく予兆にすぎないのではないだろうか。今の時代はVUCA時代と称される中、更に予測不可能な事態が起こりうる可能性は十分にあるだろう。そして、その中で私たちは子どもたちへの教育の維持と発展を考えて行かねばならないということ、そのような時代を生きる自律的な学びができる子どもたちを育てていかねばならないといった方向性を、今回のカンファレンス準備会を通して再認識をした。

さて、今回のカンファレンス準備会では、このような事態に対して福井県の学校だけでなく、県外の学校がどのような状況か、その中でどのような取り組みを行っているのかを知ることができた。その中でも印象的だったのは、ほとんどの先生方がこのような事態の中で、何もできないと嘆くのではなく、今できることは何か、さらには今じゃないとできないことは何かを考えていたことであった。今、子どもたちのためにできることとして、いくつかある中の一つにオンライン授業があるが、それを行うにも

ネット環境の整備やネット格差によるいじめの可能性等、多くの課題があることを知った。一方で、課題だけでなく、もう既にオンライン授業を実践している県外の学校の先生からは、オンライン上では不登校の子が授業を受けるようになったことや、チャットを通して気軽に質問をしてくる子が増えた等の肯定的な意見もお聴きすることができた。

また、子どもたちが自分で学習する機会が増えたことから、ちゃんと学習できているのか不安に思う意見もあった。しかしそれは、今までの教育が、自律的な学び手を育てられていたのか、という議論にもなりうることだと思った。今を乗り越えるだけでなく、その先の教育についても見据える必要があると感じた。

木村先生のお話であったように、VUCA時代の中、今後更に社会全体が転換していくことだろう。私たちも、そのような社会の中での教育を考えて行かなければならないと感じる。もしそこで学校や教師が、常に変化する社会や進化する教育の波に乗り遅れてしまったら、子どもたちに社会を生き抜く力を養成する教育を提供するという使命を全うすることはできないだろうと感じる。今回のカンファレンス準備会を通して、さまざまな学校の取り組みをお聴きすることができ、今後の教育の展開等、色々と考えることはあるのだが、現在インターンという立場でこのような状況の中、学校現場と子どもたちとどのよ

うに関わっていけばよいのか不安だけであるが、教職大学院の学びの中で培ってきた「協働」のスキ

ルを發揮して自分にできることを全力で頑張ろうと思う。子どもたちのために。

## Trial and error でアップデートの毎日に

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス小学校 海東 直希

まず、感じたことは、「Zoomでもイケる」である。「イケる!」というポジティブな感情と「イケる…」というネガティブな感情、どちらも含む複雑な感情とでも言えようか。新幹線に3時間揺られなくとも神奈川の自宅から参加できる。でも、大好きな福井への旅がなくなってしまう…と考えるとどこか寂しい気持ちにもなる。大学に足を運ぶと、先生方や院生の方と直接お会いすることができ、交流しながら学びを深めることができる。とはいえZoomでもそれはできてしまっていて、これまでと同じく充実した時間を過ごすことができた。もちろん「実地と遠隔どっちがいい?」と問われれば、間違いなく「実地」と答えるだろう。ただ、「新しい学びの在り方を模索する」という意味において、「遠隔」への挑戦は、非常に楽しかった。

午前のプログラムは、実践的な自己紹介をもとにした「三つの種」、午後は木村先生の中身の濃い示唆に富むプレゼンと、「経験のない不確かな状況のなかで学校を維持し発展させるために教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」をテーマにした討議であった。具体的に記述すると膨らみすぎてしまいそうなので、当日の内容を受けた上で、今後大切にしたいことを記述させていただこうと思う。

ここ数ヶ月で、私たちの暮らしは一変…まさにVUCAという不確かな世の中になり、常識が変わりつつある今、学校の在り方を問い直し、再構築する時が来ている。準備会を通して見えてきた目下の課題は、①前例がない事態であること ②教育を変える難しさの根源にある「経験知」 ③子どもの心の持ちようや意欲。これらに対峙しながら過ごしていく上で、①Trial and error ②経験知の転換 ③教師の在り方(ワクワク)を挙げたい。〔①〕コロナ

禍の不測の事態、前例がなく、教育現場も手探りの状態が続いている。模索の日々である。また、様々な先生方との交流から分かったことは、ICTの導入や活用状況をはじめ、学校ごとに取り巻く状況は異なっているということだ。つまり、学校ごとに、あるいは学年ごと、クラスごとに、最適解や納得解を探す日々をこれからも続けていくことになる。絶対の正解がないわけだから、「Trial and error」の気持ちを大切にしていきたい。〔②〕三田村先生からの問題提起にあったが、分かっているものの以前から教育が変わらないという現実がある。コンテンツ主義が変わらないから、コンピテンシーの重要性が訴えられているのだろう。変わらない原因の一つは、我々教員が「それしか経験していない」ことが大きい。経験していないからこそ、そこから抜け出すには抵抗がある。経験したことに重みがあればあるほど、変えにくいという現状がある。こういう現実に対し、自分たちがどう立ち向かっていけるのか、大学院でどう学んでいくのかが、まさに今、問われている。〔③〕子どもたちの心の持ちようは、学習にも影響する(前川先生談に共感)。子どもたちに対する声掛けは日頃から、意識していきたい点だ。ただ、登校しない日々の中で子どもたちとの繋がりを強くすることには限界があろう。力を入れるべきもう一つは、(半ば強制的にでも)とにかくこの状況にワクワクすることなのだろう。コロナ禍以前に提言された資料「未来の教室ビジョン」1頁(2)では、「一人ひとりの子ども達の心をワクワクさせ、未知の課題に果敢に挑戦する心を引き出し、未来を創る当事者(チェンジ・メイカー)に育むための教育のあり方を具体的に提言したい」と書かれている。個人的に驚きであったのは、“ワクワク”というマ

インド面に繰り返し言及されているところである。過去の授業を振り返ってもそうだが、納得のいった授業では、必ず大人である自分自身も楽しんでいたように思う。子どもの学びを変えるには、大人こそが学びを変え、思考を変えなくてはならない。

ステイホームで過ごす日々。オンラインの学びや個別の学びをせざるを得ない「現在の自宅学習」と、EdTech や学びの自立化について書かれた「未来の教

室ビジョン」の資料とが重なる部分が多い。この指針をもとに、この一年で子どもたちが“自律的に学ぶ土壌”を創っていきたいと思う。5月6月…と休校期間は長く続くだろう。子どもたちや学校の現状を出発点に Trial and error で進み、経験知から転換、教育観をアップデートさせる等、大人である教師からワクワクと挑戦し、省察を繰り返していくことを絶えず楽しんでいきたいと思っている。

## カンファレンス準備会に参加して

学校改革マネジメントコース1年/勝山市成器南小学校 前川 壽人

今年度より1年履修として教職大学院に入学するにあたり、「学び続け、変化し続ける教師と学校」を自分のテーマとして設定した。昨年度末よりコロナウィルスが流行し、私の勤務する学校でも卒業式の簡素化や入学式の延期、長期休業と大きな変化が起きた。今回のカンファレンス準備会も Zoom を用いて行っており、これまで「必要がないから」と導入を先送りしてきた教育への積極的な ICT 活用を、今回のコロナ過がある意味後押ししたような形となった。今回のカンファレンス準備会でお聞きした話や、話し合った内容は、私の「変わらなければいけない、変えていかなければならない。」という思いをより強くした。以下、今回のカンファレンス準備会を通じて考えたこと、感じたことを書き記したい。

①コロナ過に対面して改めて浮き彫りになった子どもが自ら学ぶことも難しさについて

今回のコロナ過では、多くの学校が子どもたちに自主学習中心の家庭学習を強いている。私の勤務校でも時間割を作成し、かなり細かく学習内容を指定している。しかし、なかなか思うように学習が進んでいない。これは、これまでの学校での指導の中で、学ぶ動機を子どもたちにしっかりと伝えられていなかったために、現環境下で自主学習ができないのではないか。学ぶ動機づけ、なぜ学ぶのか、学ぶことの楽しさを我々教師は子どもたちに十分伝えられて

いなかったのではないかと。授業改革の一つの視点が得られた。

②テクノロジーの活用が不十分な現状

前半の講義にもあったが、現場では ICT 機器を十分に活用するための「人、モノ、金」の3要素すべてが不足している。それでも、これまでは教師一人一人の創意工夫で何とかしてきたし、これまで ICT 機器を積極的に活用することの必要性を感じることも少なかった。しかし、今回のコロナ過は、これまで目をそらしてきた現状を突き付けてきたと感じる。人の要素として、教員の ICT 機器活用のための知識が不足しているとの指摘があった。私はその原因の一つが教員の成功体験にあると感じた。これまでの教室で行う学習方法、一律の指導方法で成果を上げてきたために、そこからの脱却が難しくなってしまったのではないかと。中高年教員の新しいテクノロジーに対する一種の拒否反応はそこから来ているのではないかと。また、現状のビルド&ビルドの環境では新しいテクノロジーに順応する時間も足りない。幸いといっているのか、子どもたちが学校にいない今ならばそういったことを話し合う時間を作ることができる。カンファレンス準備会后、学校で話し合う時間を作ることに決めた。

③長期休業中の各校の取り組みについて

各校が児童の学びにかかわるために、いろいろと模索している様子が分かった。ZoomやLine等を活用した授業の形も各校考えているが、実際に導入しようとすると、インターネットを活用できる環境にない児童が一定数存在し、その子たちをどうフォローするかが難しく、教育の機会均等を求めるのであれば、現状遠隔授業は導入が難しいのではないか、ということに話が進んだ。ただ、遠隔朝の会を行って児童の様子を見たり、子どもの学習のフォローを遠隔で行ったり、といった手段はとれるのではないかと感じた。また、遠隔授業を行う上で障害となるものとして、保護者の理解も挙げられた。今、保護者が学校に求めることは児童の学力の保証やストレスの軽減であり、学校が保護者に求めるのは児童の安

全と学習への協力である。たがいに求めるものが微妙に食い違っているため、不満がたまってしまっているのではないか。たがいの理解を深めるために、児童とZoom等でつながる前に、保護者とオンラインで飲み会でもしてみてもどうか、という意見は面白いと感じた。

今回、Zoomを使って本格的にグループセッションを行った。現在、本校でも児童とZoomで健康観察や朝の会を行うことを計画しており、今回のカンファレンスはその練習にもなった。同じグループになった先生方も、慣れない環境下で自分たちのできることを模索されており、刺激を受けた。このコロナ過は教員の働き方だけでなく、教育の在り方を考え直すいい機会にできるのではないかと改めて感じた。

## カンファレンス準備会に参加して

ミドルリーダー養成コース2年/岐阜聖徳学園大学附属中学校 小椋 幸美

教職大学院に通わせていただき2年目になりました。1年間通わせていただいて、自分がどれほど成長できたのか、自分はどれだけのことをやってこれたのかなど、振り返ってみるとなかなか自分が思った通りの1年間ではなかったかもしれません。しかし、自分のやってみたいこと、思い描いていたことが、より具体的に「自分事」として考えることができるようになりました。今までは、ただプロジェクト型学習をやってみたくて漠然と思うだけでしたが、その教育をするために、何が必要で、何をやっておかないといけないのか、どのように進んでいくのか、どんな問題点があるのか、などじっくりと学び、考える時間となったと感じています。このようなことを思いながら、カンファレンス準備会に参加をしました。そのときに、「プロジェクト型学習を通して、子どもたちの目指す姿を教えてほしい。」と質問を受けたとき、すらすらと「数学で問題が解ける、テストでいい点をとるのももちろん大事だけど、それだけが数学の面白さや楽しさではありません。むしろ答えに行き着くまでの過程であったり、答えがな

いかかもしれないけど、そこを目指して努力する自分の姿であったり、自分の身近に数学を感じたりすることに数学の面白さがあるので、それを感じてほしいと思っています。」と答えました。おそらく1年前の自分では簡単に答えることはできなかったと思います。この1年間の自分の成長を感じて、少しうれい気持ちになりました。カンファレンスやラウンドテーブルを通して、自分の気持ちや考えを話すことによって、自分自身の中で整理し、確立し、自分事にしていくことができる、つまり「実践」して「省察」するサイクルができてきたのだと感じました。

また、いろいろなお話をさせていただくなかで、同僚の先生たちや子どもたちに感謝の気持ちを持っている自分に気が付きました。ある先生は面白そうと言って一緒に考えてくれたり、親身になって相談にのってくださったり、自分ひとりでやろうとするから、苦しいんだとそのとき改めて感じたのを今でも覚えています。「協働」の大切さを、言葉では理解していましたが、実感したのはそのときです。も

ちろん今までも一人で働いてきたわけではないですし、助けることも助けてもらうこともたくさんありました。でも、こうして、一つの教育に対してじっくり腰を据えて、一緒に考え、アドバイスをもらい、手探りながらも進んでいくことに楽しさや喜びを感じる瞬間でもありました。そして、何よりも私にパワーをくれたのは子どもたちです。子どもたちのあのキラキラした目、こんなことが分かったと見せにくる表情、分からないところを友達と協力して解決しようとする自然につながる仲間の輪、私自身が知らないこともたくさんあり、子どもたちの話を聞きながら、自分が勉強させてもらっていました。教科書から飛び出した子どもたちの学習は、自分の予想をはるかに超え、数学という枠組みさえ簡単に飛び

越した、「学ぶ姿」そのものでした。そして、このように、手探りながらも進む私たち教員側も「学ぶ姿」そのものであると感じています。

新型コロナウイルスの影響で休校が続き、予定通りとはいかない毎日です。しかし、学校によって取り組み方の違いはありますが、ICT 機器の活用など、教育の幅がひろがったり、伝えるという観点でその単元の捉え直しをしたりするなど、悪いことばかりに目を向けるのではなく、前向きな考え方の大切さを感じました。予定していたことがうまくできなく、今後の目処も確実ではないですが、今できることを精一杯やりきって、この状況を乗り越えていきたいと思えます。

## コロナ禍で問われるチーム学校のプロジェクト学習

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立羽水高等学校 永田 卓裕

本校がプロジェクト学習 (PBL) に取り組みはじめて今年度が 5 年目になる。最初の数年間私たち担当者に寄せられた「なぜこんなことをするのか」、「いつまで続くのか」などと言った声は、年を重ねるごとに年々少なくなってきた気がある。この 4 年間、日々の PBL で生徒と一緒に学んだり、また教員研修会を開いたりなどを通して、先生方に PBL の価値、PBL でしか養えない力があることをご理解いただき、学校全体として PBL を推進するような体制はできあがりつつある。それを象徴するかのように、昨年度は校外で開かれる PBL や探究学習に関するイベントに積極的に参加するよう促す先生方も増えてきた。また、PBL を通して生徒たちの中にも、本校が力を入れる自己肯定感、協働力、傾聴力、省察力、課題発見力、課題解決力、市民性 (U S U I 7) の力が少しずつ養われていると感じている。

ここ数年、様々な研修会の場や教育関連の書籍の中で、「これからの社会は Volatility (激動)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (不透明性)「VUCA」なものになっていく」

という文言を何度も目にしてきた。私もだからこそ、PBL を通して様々な状況に対応できるコンピテンシーを身につけさせたいと感じていた。だが同時に、実際に VUCA を肌で感じるのはもう少し先のことだとも思っていた。

ところが、コロナによってそれはすぐに現実となった。社会全体もそうであるが、学校自体のあり方もまさに VUCA なものになったと言える。このような状況において学校もしくは教員に求められる力こそ、私たちが PBL を通して生徒に身につけさせたいと思う資質・能力 (コンピテンシー) そのものである。コロナは私たち学校に、様々な課題と選択肢を与えた。授業、クラス経営、学校行事、部活動、進路指導などをどうするのか、また YouTube や Google など多種多様なオンラインシステムの活用をどうするのか。議論が先行しなかなかに進まない現状は、様々な学校現場で起きている。コロナによる影響が長期化することが予測される中、この状況下で学校は何を優先するのかは、まさしく学校としての課題設定であり、またそれに対して今ある資源と手段の中で

何をするのか・できるのかは課題解決策の創造である。課題設定の大枠は、「生徒たちの学びを止めないこと」であると考えている。ここでの学びとは、単に各教科の知識を増やすことだけを意味しているのではなく、この現状をピンチとして捉えるのではなく、今しかできないことにチャレンジするという学びに向かう積極的な姿勢をも含んでいる。

そのために学校ができることは、頭を付き合わせて議論し合うことだけではない。各教員ができそうなこと、やってみたいことに積極的にチャレンジする主体性や、刻々と変化する状況からその都度自分

がすべきことを見極める課題設定力を発揮する必要がある。コロナに翻弄されている状況と向き合い、どう乗り越えていくのかは、まさに学校にとってのPBLである。そしてその中でも大事なことはチーム学校として動く協働力であろう。校務分掌や担当教科、学年、年齢などに執われて、フリーライダーになっている暇はない。それぞれがその瞬間できることを見極め、チャレンジし、実践を見直し、改善していくことを積み重ねる中で、新しい学校の形・学びの形が作られていくと考えている。

## これからの学校の在り方を考える

### ～カンファレンス準備会に参加して～

学校改革マネジメントコース2年/美浜町立美浜東小学校 三宅 育代

コロナウイルス感染症拡大防止による学校休業が延期され、先の見えない日々が続いています。状況は日々変わり、教員は学校再開に向け、今できることを模索している毎日です。大人も子どもも、予測できない未来に対応していく力を身につけていかねばならないと実感しています。このような中でのオンラインによるカンファレンス準備会は、これからの学校の在り方を考える上でも有意義なものでした。

柳沢先生のお話の中には、心に突き刺さる言葉がたくさんありました。「これまででない事態で、この状況の中でどうしていくか、今まででないアプローチが必要。」「コンピューターを使ったシステムは一方通行だったが、双方向で使う必要がある。」「空間を超えた協働の省察と探究が必要で、今こそネットワークの展開のチャレンジの時である。」「学校が未曾有の状況であるからこそ、ネット上のカンファレンスにより一緒に考える機会。」これらの言葉を聞いて、今こそこれからの学校の在り方を考え、改革していくべき時であることを強く感じました。

また、木村先生の「これからの社会 教育とスキルの未来」についてのお話では、各国と比べて、日

本の後れを実感しました。子ども達の学業の継続の保証に向けて、この危機的状況下で一人で学ぶスキルの不足した子ども達へのサポート、子ども達の学びを支える保護者へのサポート、教師たちへの専門的なサポートとアドバイスの提供、どれもが各国に後れを取っていることが明らかになりました。特に情報化への日本の後れはとても心配です。学校が休業になり、この先もどうなるか分からない日々です。一刻でも早くオンライン授業に向けて整備していかねばならないと感じました。

オンラインでのカンファレンスは初めての試みで、正直、不安でしたが、実際にやってみるといつものカンファレンスと変わらず、楽しく学びの多い時間となりました。福大に通うのに往復4時間かかるので、時間も有効に使えます。もちろん、実際に会って、空気を感じながら語り合うに越したことはないのですが、想像以上の使い勝手のよさで、これからの教育の幅が広がるような気がしました。各地域の先生方と、有意義な情報交換をすることもできました。

4月から、異動により学校も立場も変わり、学校休業という異例の事態の中、慣れない事務仕事に追われていましたが、カンファレンス準備会でお話をお聞きし、一番にしなければならないことは、子ども達の心のケアと学習の保証だという思いが強まりました。そのためには、保護者の方の協力と理解が不可欠です。このような状況の中、各家庭のネット環境調査を行い、そして早急に学校と家庭をオンラインでつなぐことが必要ではないかと思えます。勤務校では、調査により動画の視聴は可能である家庭が多かったので、学習動画の紹介と、動画視聴による学習をしたかチェックし、確実に家庭学習に取り組めるようにすることは可能でした。県教委からのわくわく授業や、教育研究所の教科書に準じた動画、NHKの動画など既存の優れた動画を利用するのは有効的です。しかし、ZoomやTeamsを利用したオンライン上での子ども達との双方向の取組となると、そのような環境が整っていない家庭はどうするかとい

うことが問題になり、校内の議論は先に進まなくなりました。

日本の学校現場は、改革がなかなか進みません。英語の教科化にしてもプログラミング教育にしても、実施されるまでにとてつもない長い時間がかかっています。日本は何か新たなことを導入することに慎重で時間がかかり、各国に後れをとっていると感じています。とりあえずやってみればいい、うまくいかなければ、次の手を考えればよいとは思いますが、多くの人に与える影響力を考えると、簡単に「とりあえずやってみる。」ということができないようです。日々の生活に追われ、立ち止まってゆっくり考えることのないまま前例踏襲で何年も過ごしてきたような教育現場ですが、今このピンチをチャンスととらえ、改革に取り組んでいく時だと感じます。リアルとネットの融合を進め、集団での学習、個に応じた学習を臨機応変に進めていくことが、これからの学校には必要だと思います。

## カンファレンス準備会に参加して

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立丸岡南中学校 山田 充

2月のラウンドテーブルの後、教職大学院でのカンファレンスの中止・延期が決まると同時に、勤務校の休校措置への対応のため自分自身の研究も中止・延期されていました。「学校が休校になり研究をすすめることができない」という大義名分を得たかのような気分になり、毎日を目の前の業務だけを行っていたころ、久々にZoomを用いて開催されるカンファレンス準備会の連絡をいただきました。連絡を受け最初に感じたのは疑問です。それはズバリ「Zoomって何？」です。

当時ニュース等で名前をкаろうじて知っている程度で、自分で使いこなせるのか、深い学びができるのかと不安にも感じました。メールに添付されていた利用法をこれまで頂いた先行文献以上の精度で(!!)読み、オンライン実験会での実践(!!)を通して、なんとかカンファレンス準備会までに使用法をある

程度理解することができました。ここで感じたことは「学ぶって楽しい」ということです。もしかすると以前の自分にとってはZoomについて学ぶことは必要性を感じず、楽しいものではなかったかもしれませんが、しかし生徒が学校に登校できない日々が続く今は、Zoomの使い方を学ぶことは今後の活動に役立つと感じ、自分自身の学ぶ意欲を喚起してくれました。単に「知らないことを学ぶ」ことも楽しいことではありますが、学んだことを実際に運用できる場がある、想像できることで「学ぶ楽しさ」は増加することを実感することができました。Zoomに限らず、一緒に添付されていた教育改革の展開に関わる資料についても、まさに今知りたい、気になっているものが多く、Zoomと同じように楽しみながら学ばせていただきました。教職大学院の先生方にこのような意図があったかどうかはわかりませんが、期限のな

い休校が続く中でも、新しい刺激があることで新しい学びが生まれることを実感しました。自宅待機を余儀なくされている生徒たちにとっても同じことがいえると思います。その新しい刺激を与えることができるように、新しい刺激になりえるものは何か、与えるための方法・課題等について今後考えていき、勤務校で実践にまでつなげていけたらと考えています。そして普段の授業が再開された際にも生徒に「学ぶ楽しさ」を実感させることができるような工夫をしていきたいと思っています。

カンファレンス準備会では様々な先生方と勤務校での現状を話し合うことが一番の刺激となりました。ブレイクアウトを用いたグループセッションは自分が思っていた以上にスムーズに行うことができ、自分の思いや考えを話したり、他の先生方が現在取り組んでいることを聞かせていただいたり、教職大学院の先生方からアドバイスをいただいたりと、あっという間に時間が過ぎました。この2カ月弱をほぼ学校内だけで過ごしていた自分にとって大きな刺激となり、自主中止・延期(?! )していた自身の研究を再開しなければ、と強く感じました。昨年度から「協働」をテーマに研究を進めてきたため、本年度は途方に暮れていたのですが、緊急事態の今は長期

実践報告のことから少し離れ、教職大学院で学んだことを活かすチャンスだと感じようと考えています。教職大学院で精読した「学習する組織」を活かして校内にオンライン授業に関する実践コミュニティを作ったり、カンファレンスで頂いた新しい刺激を周りの先生方に伝えたりと、もちろん、大風呂敷きを広げ過ぎることなく、自分にできることから始めていこうと考えています。

研究再開、最初の活動をカンファレンス準備会の3日後に始めました。本年度、私は第1学年の学年主任となりました。転任してきた先生方がいらっしゃいますが、在宅勤務も多く、もちろん歓迎会もできない、例年よりコミュニケーションがとれずになります。「協働」を掲げた自分のテーマに則って、またカンファレンス準備会を通して学ばせていただいた「学ぶ楽しさ」を部会内の先生方に伝えることを意図して、Zoomを使ったオンライン飲み会兼 Zoom勉強会(負担がないように40分限定)を早速企画しました。研究と言えないような小さな一歩ではありますが、今年一年、自分自身が楽しみながら研究を進めるための大切な始まりの一歩として、スタートの合図としていきたいと思っています。

## カンファレンス準備会に参加して

学校改革マネジメントコース2年/福井市森田中学校 青木 喜一郎

新型コロナウイルスの影響で、本来なら皆様と直接お会いして学び合うはずだった4月カンファレンス準備会がZoomを使用しているものとなりました。事前の接続準備会から少し不安がありましたが、何とかこの会に参加することができてほっとしています。

今までタブレットに向かって話すという経験がない私は、接続準備会の段階から機械に向かって話すことに少し不思議な感覚がありました。しかし、次の4月カンファレンス準備会では、普通に話している自分に気付き、自身に驚きを感じました。

このコロナで大変な状況の中、大学の先生方が新しい手法を模索しご尽力くださったからこそ、私たちは恵まれた環境で学習できるのだと思い、このことに深く感謝いたしております。そして、これがOECD Learning Compass2030 コンピテンシーの一つである「適応力・柔軟性・アジリティー」にあてはまるのだろうかと思っています。

私は今年度、第3学年の学年主任なので、生徒の進路決定という大事なことを預かります。そこで、単に受験に向かって頑張れというのではなく「夢を

もつ」ことを大切にしてキャリア教育を充実させていこうと考えながら今回のカンファレンス準備会に参加しました。

午前のカンファレンスでは、「受験期には生徒は選ばれるということは意識できるが、自分が選ぶという主体的な力はまだ弱い」ということに気付かせていただきました。

また、これからの入試は、インプット重視のものからアウトプット重視（中学・高校時代に何をやってきたかを説明できる力）に変わるということにも改めて気付くことができました。学年主任として、生徒たちのこの1年間を受験に捧げるような学校生活にさせてしまうのではなく、自分の夢や体験から得たことを省察し、自分や友人たちと対話しながら

充実した学校生活を送ることができるように支援しなければいけないと思いました。

午後のカンファレンスでは、「VUCA」の時代を「Learning Compass」を使って良好な状態の社会にしていくというこれからの教育の使命を学習することができました。文科省のGIGAスクール構想、経済産業省の未来の教室なども我々教師は理解しなければならいと思いました。

このようなことを学習すると、新しいものに向かって我々教師は早急に動かなければならないことに気付きますし、焦りすら感じます。私たちの学校でも、これらの気付き（焦り等も含め）を土台として、新しいことにみんなで取り組もうとする学校風土（著書：The Principal で頻繁に使用されていた語句）をつくっていきたいと思いました。



## 東京サテライト校紹介

### 福井大学連合教職大学院 東京サテライト校の開校にあたって

福井大学連合教職大学院特命教授 福島 昌子

新型コロナウイルスへの感染拡大防止策として緊急事態宣言が出され、多くの子どもたちが自宅学習を余儀なくされている現状にあります。そこで学校が果たす役割として、これまで以上に他校との情報共有、協働・連携を図ることが求められ、ICT 機器を使いながら如何に子どもの学びを保障し、その保護者を支えていくかが大きな課題となっています。

そのような中で、この4月に令和2(2020)年度福井大学連合教職大学院のサテライトが東京に開校されました。組織的なサテライトは福井大学でも初めてであり、連合教職大学院にとっても教師教育支援組織の初の分校となります。設立された目的は、福井が行ってきた「拠点校方式の教師の学び」を東京や関東の国公立の幼少中高の3499校(基幹統計R元年調査による)の先生方および全国の教育機関や先生方に向けて発信し、教師の新たな支援組織を展開することにあります。また、東京は多くの情報が集まり交通の利便性にも長けているため、関東以外の先生方も学びの拠点としやすい環境にあるといえます。そういった意味では、東京サテライトは地域空間を越えた探究・協働の追求ができる可能性を秘めた拠点といえます。

先日、4月25日に開催されたガイダンス及びカンファレンス準備会には、東京サテライトの一期生6名、福井、奈良を拠点とされている院生2名、合計8名の国公立の幼小中高校のミドルリーダー、学校改革マネジメントのM1の先生方が参加されました。コロナ対応もあり、Zoomと対面式の併用で行われ、新潟、神奈川、東京の多種多様な学校種の先生方が集まり、各地域の特色が生かされた教育内容、教育実践を伺うことができました。また、東京のメンバーは、5月2日と両方のカンファレンス準備会にも参加予定だったため、Cycle2では「各学校の新型コロ

ナ対応の現状を共有し、自校の課題等を検討する」をテーマに自由に話し合う場としました。その情報共有で見えてきたことは、現状のオンライン授業の行われ方について、地域格差、経済格差など様々な諸問題があるということです。例えば、生徒一人一人が既にタブレットを所持し、4月当初から通常のカリキュラム通りに毎日オンライン授業で学んでいる生徒、その一方でICT機器は家庭に親のスマホのみのためオンライン学習に参加できない生徒、接続重量オーバーのため配信された動画を見ることができない生徒、また親がテレワークで昼間はノートPCを使わず、配信された資料は夜中に兄弟姉妹で順番に見ている生徒など、様々でした。また嬉しい情報としては、幼稚園の先生から園児はオンライン学習が無理なため手紙を書いたり、親のスマホを通じて子どもの様子や声を聴いたり、それを通信に載せて配付することで、子どもと共に保護者を支え、繋がりが途切れないようにしているなどの話がありました。このように各地方の学校の現状を共有し、院生の先生方で検討できたことは、まさに拠点校方式のメリットが最大限に生かされた学びであったと思われま

す。さて、最後に、これから東京カンファレンスに参加される院生の先生方もいらっしやると思いますので、サテライト校について少し説明をさせていただきます。サテライト・オフィスは山手線の内側(大塚)にあり、東京駅からOfficeビルまで20分と交通の便も良く、展望コミュニティ・ラウンジは、院生の方たちもスタッフ(福島)が在中時は自由に利用することができます。このラウンジは、人と人とを繋ぎ、コミュニケーションと協働を可能とする様々な工夫が至る所に施された創造性豊かな空間となっています。また、カンファレンスは、板橋区教

育研修センターの研修室を使用させていただき、ここではノートPC、Wi-Fi、Zoom、オンラインプリンターを院生と教員は全て利用できます。

是非、東京カンファレンスにもご参加いただいて、全国に向けた新たな学校研修システムの実現の可能性を共に探り、東京サテライト院生の先生方と協働・探究の輪が広がることを期待しております。

## 教育改革の動向

### 予測困難な時代の教育

#### —情報と情報技術を巡って—

福井大学連合教職大学院准教授 稲葉 敦

私は福井大学に着任する直前に、文部科学省において教育における ICT 活用及び情報教育の担当として学習指導要領の改訂に携わっていた。その際に関わった中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の「情報ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」で示されている今日の情報社会についての次のような認識が、このところよく思い起こされる。

今後も情報技術は飛躍的に進展し、常に新たな機器やサービスが生まれ社会に浸透していくこと、人々のあらゆる活動によって極めて膨大な情報（データ）が生み出され蓄積されていくことなどが予想されるが、職業生活ばかりでなく、大学等での学修や生涯学習、家庭生活、余暇生活など人々のあらゆる活動において、さらには自然災害等の非常時においても、そうした機器やサービス、情報を適切に選択・活用していくことがもはや不可欠な社会が到来しつつある。<sup>1</sup>

ここに「自然災害等の非常時」とあるのは、主として地震等の災害を想定したものである。東日本大震災等の際、テレビ等のメディアに接することが困難なほどに被害の激しかった地域において、生活の維持に必要な情報のやりとりに SNS が大いに活用さ

れたが、その一方で人々の不安に乗じたデマが流布されもした。

コロナ禍と言われる今日はどうであろうか。私たちは連日多くの情報に接しているが、それによってかえって不安を募らせている人々も少なくない。ネット空間には感染者等に対する心ないバッシングや、考えや行動を異にする他者への容赦ない攻撃が溢れているし、一時期には科学的根拠の極めて乏しい感染予防法が広まったりもした。

自然災害と感染症拡大とで多少の違いはあるとしても、私たちは多くの情報から安心・安全を得ると同時に、時に翻弄され、あるいは自ら不適切な情報を発信してしまっているという状況に変わりはないようだ。日々生み出される膨大な情報の中から適切なものを吟味・選択し、他者に配慮しながら発信することを含めて適切に活用していかなければならない。これは上に引用したように、もとより非常時に限ったことではないし、大人だけでなく子どもたちもこうした力を備えていなければならない。

学習指導要領で「情報活用能力」と呼んでいる、いわゆる「情報リテラシー」の育成が言われて久しいが、どこか本流ではないといった雰囲気があった。しかし今日私たちが直面しているようなこれまで経験したことのない危機がまたいつ訪れるともわからない予測困難な時代を生き抜き、未来を創っていく

子どもたちには、情報を適切に選択し活用していく力は必須のものであり、私たちはこのことに正面から向き合わなければならない。また、そうした力を十分に発揮するためにも、数的なものも含めて情報を適切に読み解く力や科学的根拠に基づいて判断する力、他者の心情や考えに思いを巡らせる想像力と寛容さ、さらに多少のことではへこたれない心の強さなども子どもたちに育てていく必要があるだろう。

このようなことを日々考えていたところで、OECD「2020年新型コロナウイルス感染症パンデミックへの教育における対策をガイドするフレームワーク」<sup>2</sup>に接した。本レポートは、今日の状況のなかで子どもたちの学ぶ機会を確保するために各国においてとられている対策を調査し、今後の計画策定の参考となる枠組みを提供しようとするものであり、とりわけオンライン教育に多くの紙幅が割かれている。

本レポートでは、社会的距離の確保（ソーシャル・ディスタンディング）方策によって学校が多大な影響を受けるなかで、オンライン教育は学習機会を確保するための代替手段として位置づけられている。子どもたちの学習機会を確保するための手段は種々考えられるなかで、オンライン教育は子どもたちの双方向的な学びを最も豊かに提供できるものであり、可能であれば取り入れるべきものとされている。もちろんこれまでの教育に取って代わるものではないが、他方で単なる一時しのぎの手段でもないと思

ているようだ。そして、この危機的状況による変化から生じた予想外の肯定的な成果として、「テクノロジーや他の革新的なソリューションの導入」、「子どもたちが自らの学びをマネジメントする自律性の伸長」が挙げられていることは興味深い。

一日も早くかつての学校の姿が取り戻されることは願って止まない。しかし、その学校で展開される教育・学習まで従前と全く同じでよいのだろうか。子どもたちの学習が途切れることのないよう、現在各学校においては苦労してICT活用にも取り組んでいるであろう。それらには平常時の子どもの学びをより豊かにし得るヒントも詰まっているはずであり、コロナ後に全て捨て去ってしまうのはあまりにもったいない。さらに、学習活動のレベルにとどまらず、前述したとおり、予測困難な時代を生きる子どもたちにどのような力を育むべきかというところから再考する必要があると考えている。ぜひ皆さんと一緒に考えていければと願っている。

1 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「情報ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年）p.1

2 木村ほかによる邦訳 (<https://www.fu-edu.net/sites/default/files/archives/2020/archive-20200423-13256.pdf>) 及び必要に応じて原文 ([https://read.oecd-ilibrary.org/view/?ref=126\\_126988-t63lxosohs&title=A-framework-to-guide-an-education-response-to-the-Covid-19-Pandemic-of-2020](https://read.oecd-ilibrary.org/view/?ref=126_126988-t63lxosohs&title=A-framework-to-guide-an-education-response-to-the-Covid-19-Pandemic-of-2020)) を参照した。

**【編集後記】** 新型コロナウイルス感染症が、国民の努力によって出口が見えかけてきたこの頃です。しかしながらまだ気を緩めてはいけない状況なのでしょう。今回記事を寄せられた皆さまの文面からは、この時期だからこそ、今までの教育を振り返り、今できることは何か、ウィルス収束後に引き継いでいくことは何か、を前向きな姿勢で考え、乗り越えていこうとする意欲にあふれていました。しばらくはオンラインでの学びが中心になると思いますが、お体ご自愛され、よりよい協働が達成されることを願っております。（ニューレター編集委員会）

教職大学院 Newsletter **No.135**

2020.5.20 内報版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp